

Fate/Grand Order
Unofficial fanbook

アヴィケブロン×アシュヴァッターマン前提
アヴィケブロン&アシュヴァッターマン型ゴーレム二体
&ドMアシュヴァッターマンで乱交本

例

の

カ

ル

デ

ア

アヴィケブロンとアシュヴァッターマンが
淫語でセックスする話

A D U L T

18+

O N L Y

Fate/Grand Order
Unofficial fanbook

アヴィケブロン×アシュヴァッターマン前提
アヴィケブロン&アシュヴァッターマン型ゴーレム二体
&ドMアシュヴァッターマンで乱交本

例

の
カ
ル
デ
ア

アヴィケブロンとアシュヴァッターマンが
淫語でセックスする話

A D U L T

18+

O N L Y

例のカルデア

～アヴィケブロンとアシュヴァッターマンが淫語でセックスする話～

みたいわ南国



この本は、個人製作、非公式のファンブックです。
原作者様・出版社様とは一切関係ありません。

二次創作をご存じない一般の方や、

関係者様の目に触れぬようご配慮をお願いします。

また、十八歳未満の方の閲覧は固くお断り致します。

例のカルデア

くアヴァイクブロンとアシユヴァッターマンが淫語でセックスする話く

カツ、コツ、カシャン。

独特の硬い足音を立て、一見奇抜な人形のような、その男は歩みを進める。

ここはカルデア。人理を守るために抗い続ける人間たちと、サーヴァントからなる組織。

長く伸びる無機質な廊下を、目的の部屋へと一歩ずつ。

そしてマスター、藤丸立夏の部屋の前へとたどり着くと、彼は鋭い金の爪を思わせる指を丸め、扉を軽くノックした。

「立夏、アヴィケブロンだ。約束通り、君と話がしたいのだけど」

どうぞ！という明るい声が戸の向こう側から聞こえて、アヴィケブロンは頬を緩める。

黄金の仮面の下に隠されてはいるが、彼は、確かに変わり始めていたのだった。

「やあ、いらつしやい。嬉しいよ、アヴィケブロンの方から声

をかけてくれるなんて」

少々幼い顔立ちをした少年は、くしやりと破顔して言った。

「うん、そうだね」

用もなくマスターのマイルームを訪れるサーヴァントはそう珍しくもないけれど、本人にも自覚があるだけに、アヴィケブロンはこくりと頷く。

厭世家、人嫌い、自身の目的にのみ忠実で、凝り性のゴーレムマスター。

そんな彼であるからして、たとえ心を許し、親友と呼ぶ相手であっても、私室を訪れたのは今日が初めてだった。

それも、わざわざアポイントをとって。

「どうかしたの？ なにか大事な話？」

「うん、そうだね」

そうかそうかとニコニコ笑って、ベッドに腰掛けた立夏は、目の前の椅子をアヴィケブロンにすすめる。

あまり愛想のないコミュニケーションもなんのその。

命懸けの戦いのなかで絆を育んできたふたりには、自分たちのやりとりが客観的にどう見えるかなんて、大した意味を持っていない。

大事な友人が自分に話をしたいと言っている、立夏にはそれだけで十分だったのだ。

そして己が受け入れられているということは、アヴィケブロン

ンにもしっかりと伝わっていた。言葉こそ少ないけれど、胸に温かいものを感じながら、小さな魔術師は椅子に腰を下ろした。カシャンと、身に纏った金属がかすかに音を鳴らす。

「君にしか話すつもりはないんだが」

「……、うん！」

「僕は……」

アヴィケブロンは言い淀む。目の前の瘦身が、軽く息を吸うのが分かった。

立夏はまっすぐに彼を見つめる。柄にもなく緊張している様子を不思議にこそ思うけれど、なんだって話して欲しいし、聞かせて欲しい。まして、君が話したいと望むことならば。そんな気持ちを視線に込めて、無言のままに続きを待った。

「僕は、恋をしたようなんだ」

驚いて、目を丸くして金色のマスクを見つめても、そこに表情が現れるはずもない。

ただ耳に残った彼の声がほんの少し、いつもよりもほんの少し甘くて、それだけで瞬間的に、彼の言ったことが真実であると、明確に理解できてしまった。

「あ……、お、……おめでと！ おめでとアヴィケブロン！好きな人ができたってことだね！ なんか、……なんか、そういうのって、いいよね……！」

反射的に手を取って、ぶんぶんと上下に振る。

厭世家、人嫌い、けれど懸命に人類を救おうとしていた不器用な彼にそんな日がやって来ようとは、思ってもみなかった。

しかしいざ報告をされてみたなら、こんなに嬉しい出来事はない。大切なひとがいるその喜びを、この聡明な友にも感じてもらうことができるなんて。

「ああ、そうかあ、良かったなあホント……！ どうなの、どんな人なの、このメンバー!? ひよつとしてサーヴァントなのかな!? もっと話を聞かせてよアヴィケブロン！」

「勿論だ、立夏。そのためにここへ来たのだから。そして図星だよ、僕の想い人は君が召喚してくれた。この出会いに、君がくれた尊い縁に、僕は心から感謝する」

「そうなんだあ……！ そっか、そっか……！」

「君がそんなに喜んでくれて嬉しいよ」

「いやなんかごめん……！ あは、ちよつと胸がいつぱいになっちゃって……！」

思わず涙ぐみそうになる立夏を、当のアヴィケブロンがよし

よしと有める格好だ。困り顔で微笑む親友に仮面越しの笑みを返しながら、ぼつり、ぼつりと言の葉を紡いでいく。

「今思えば、一目惚れだったんだ。君が召喚に立ち会わせてくれたあの日、現界した姿を見て……。これほどまでに美しく、活力に満ちて、いつそ荒々しいまでの生命の滾りを見事に体現した存在があるものなのかと。僕は言葉を失ったんだよ、詩人のくせにね」

「はは」

アヴィケブロンなりのジョークに応えたなら、目尻の湿りも吹き飛んでいく。

そうして立夏の脳裏に、カルデアと目的を共にし、戦いの道を歩むと誓ってくれた仲間たちの顔が浮かんだ。

女性だからといって、おしとやかな面々ばかりではない。

なにせ英霊なだけに美しくも強く、気高く、ちよつといきすぎて荒々しい、なんて形容もあながち的外れとも言えなくて、その条件だけならばもうほぼ全員が当てはまってしまふ。

素朴な疑問が頭を過ぎつて、立夏は少々気まずそうに、遠慮がちに口を開いた。

「……アヴィケブロンがそこまで言うひとつて……。あ、いや、そこは伏せた方が気持ち楽なんだったら全然それでいいんだけど！ そうだな、でも、もし良かったら……。またいつか、聞かせてもらえたら嬉しいなって」

「アシュヴァッターマンだ」

「へ？」

「アシュヴァッターマンだよ、立夏。僕は彼が好きなんだ」

おおらああああああ！いくぞマスターアアアアア！という野太い怒声、もとい雄々しい咆哮が、脳内で再生される。美しい。活力に満ちて、荒々しい。なるほど。あーなるほど、なるほど。

うん、確かに！

「そっか！ ごめん、ちよつと意外かもつて一瞬だけ思っちゃったんだけど……。でもアヴィケブロンの言う通りだね！ アシュヴァッターマン、強くてカッコイイよね！」

「そうなんだ、立夏！ 強くてカッコイイんだよ！」

手に手をとつて、きやぴきやぴと飛んで弾んで。

たとえ素人同然のマスターと評されようが、ありとあらゆる個性的なサーヴァントに出会い成長を遂げた、立夏の適応力は並ではない。柔軟で、温かで、凹凸の激しいサーヴァントたちのあるがままを受容する彼の精神のありようが影響してか、こゝカルデアでは、英霊同士がやたら恋愛関係に至りがちな傾向

があった。

次元を旅する類のサーヴァントや、世を見渡すほどの神に等しい視野を持つサーヴァント、そうして時折やって来るサポーターのサーヴァントからは、あまりのイチャつき人口の多さにある種の畏敬の念すら込め、“例のカルデア”と呼ばれている――、その事実は、カルデアの最奥で嚴重に管理されたいくつもの聖杯と、ダ・ヴィンチちゃんのみが知っているのである。

ひとしきりはしゃいだあと、立夏は満足げな顔をして、再びベッドに腰掛けた。心なしかアヴィケブロンもそわそわと浮き立っているように見えて、ついつい詮索しなくなってしまう。

「いやいや、そっかそっかー。それで、一目惚れして？ どうする？ 告白するの？ アヴィケブロン！」

「もうしたよ。彼は受け入れてくれた。僕ら、恋人同士になったんだ」

「えっ?! えーーーーー………っ!!! 全然、全っ然知らなかった!!!」

「最近の話だし、僕はこの通り友人も多くないからね。とは言

え部屋の行き来が頻繁になって、ダ・ヴィンチ辺りは勘づいてるんだろうけど」

「ふわあー、そおカー！ うーんでも、あー、おめでたいー！ おめでたいなーホントに!! 結構カップルになるひと多くつてさ、色々聞いたりはするんだけど……アヴィケブロンもカー！ そっかあー……!!」

「ふふ」

なんだか照れくさそうにベッドでごろごろと転がる立夏を、アヴィケブロンも楽しげに見つめている。

「ねえ聞いていいかな、最近つて、どんな風に仲良くなったの？ アシュヴァッターマンが来てくれたのつて、ちよつと前ぐらいだもんねえ。猛アブローチしたつてこと!!」

「ははは。そう言われたら、そうなのかもね。じゃあ、少し長くなるけど……、僕らのこれを、聞いてもらってもいいのかな」

「もっしろん！」

シートに両肘をついて頬を支え、立夏はワクワク顔で体勢を整えた。こほん、とひとつ咳ばらいをしてから、アヴィケブロンが話し始める。

「あれはね、君が彼を召喚して数日経った頃だった……」

夢見るように少し目線を遠くへやって語るさまは、装いのせいもあってどこか神秘的だった。普段の彼もうつとりするほど

いい声なのだが、今日はさらに輪をかけてよく響いた。

アヴィケブロンは驚いていた。

あの衝撃的な出会いからずっと彼のことばかり考えながら過ごしていたので、新しいゴーレムのアイデアすら出ず悶々としていたのだが、なんともはや。

その彼が、かの美しきアシュヴァッターマンが、己の工房に自らやって来てくれることになるうとは。

「よお。んじゃまあ、邪魔するぜー！」

ブシュ、と扉の開く音がして、本人がひよっこりやって来ても、まだ信じられそうにない。

きらきら光る仮面の下で、アヴィケブロンは間抜けた形に口を開けたままだった。

召喚されてわずか数日、新入りの彼は早速トラブルを起こしたのである。

先に喚ばれていた同郷の英霊たちと再会を祝い、どんちゃん騒ぎをし。酔った挙句に、宝具で隣室との壁をぶち抜いた。

羽目を外して酩酊し、また、カルデア内部は少々のことでは傷つかないと説明を受けたうえのことだったのだが、巡り合わせが悪かった。

酒盛りの会場となった部屋の隣はたまたまアヴィケブロン

の工房であり、諸々の作業に必要とされる特別な広さを確保するために、ほかの場所よりも壁の強度がやや劣っていたのである。というより、シミュレーションルーム以外では宝具の使用は禁止つて言ったよね!? とは、ダ・ヴィンチの談だ。

とにもかくにも哀れな壁はぶち抜かれ、そこに置かれていた貴重な素材もあらかた粉碎され、試作していたゴーレム数体すら台無しになってしまった。

惨状を目の当たりにしてさすがに酔いも醒めたアシュヴァッターマンは額を床にこすりつける勢いで謝罪し、弁償は難しいにしてもなにか、なんでもいいからやらせて欲しいと懇願した。

そうして周囲が息を呑むなか、アヴィケブロンは彼にこう言ったのである。

「もしも詫びをということなら、僕の手伝いをしてくれないか」
アヴィケブロンの人嫌いつぷりを知る者たちは思わず目を見張ったのだが、アシュヴァッターマン自身は任せてくれ!と

張り切るばかり。

では早速明日から頼もうか、ととんとン拍子に話が進み、こうして奇妙な組み合わせの、普通ではない日常が始まったのだった。

「アヴィケブロンだ。僕の工房へようこそアシュヴァッターマン」

「アヴィケブロンか。いや、悪かったな昨日は。大事なもんもあつたろうに」

「構わないさ。また集めて、ゴーレムを作るだけだから。どうぞこちらへ」

いそいそと席を立ち、客人に椅子をすすめる。つま先の尖った足で器用に歩くアヴィケブロンを見つめ、アシュヴァッターマンは不思議そうに首を傾げた。

「質問してもいいか？」

「何なりと」

「どうなつてんだ？ その靴」

「僕は魔術師だからね」

「そおか……」

答えになつていいのか、いないのか。そんな返答でも、アシュヴァッターマンは特に気にする風もない。

今度は逆に、アヴィケブロンが口を開いた。

「僕について、君は何か聞いているのかな。ゴーレム遣いだということは、皆知っていると思うけど」

「あーまあ、俺が聞いて回ったわけじゃねえが。あんた人付き合いが嫌いらしいから、他人に手伝いを頼むなんて明日は槍でも降るんじゃねえかとは言われたな」

「いい読みだ」

「へえー」

人嫌いを否定せず、かといって手伝いを頼むのもやめない、矛盾した態度をアヴィケブロンはとつたが、アシュヴァッターマンはそんなもんかという顔で応えている。

「んで、俺はなにを手伝つたらいいんだ？」

おまけに、深くは追及せず、自分のやることをはっきりさせるための質問を重ねてきた。

仮面の下で、皮膚の荒れた口元が、にんまりと弧を描く。

素晴らしい。彼はまったく素晴らしい。単なる造形だけでなく、内面までも。

立夏に感じるものとはまた違うけれども、確かな居心地の良さを、アヴィケブロンは感じていた。

「とりあえず、壊れて散らばつた物の整理を頼もうかな。ある程度は片付けたけど、なにせ数が多いからね」

「了解だ、アヴィケブロン。よく分からねえもんはその都度指示を仰ぐが、それで問題なかったか？」

「無論だよ。いつでも声をかけてくれ」

己の世界に没頭しがちな頑固者のゴーレムマスターが「いつでも声を」と言うことがどれほどレアな発言なのか、アシュヴァッターマンには分かっている。

同時に、「もつと知りたい」と湧き上がった好奇心を抑制できている異常性について言えば、本人にすらその自覚はなかった。

いつも通りのアヴィケブロンなら、もつと知りたい、の対象が素材や呪術でなく人であったとしても、時間を忘れ探求心のままに調べ尽くし、質問責めにして聞き取って記録して、己の納得のいくまで膨大な数の資料を作り続けただろう。

そうしなかったのはなぜなのか、どうしてそんな気にならなかったのか。いくら賢人といえども、覚えがなければ問いを立てる機会もない。

瘦せた胸に生まれて初めて芽吹いたのは、特別な感情。思うがままに振舞って相手の感情を害したくはない、という、実にアヴィケブロンらしくない素朴な情動だった。

今は気付かれることもない小さな芽は、それでも遙かな樂園を目指し、健気にその葉を、愛しの輝きに向け広げている。

広い工房の一方の壁に、大穴。そしてせつせと片づけをしてくれている、褐色肌、炎を思わせる真っ赤な髪をした、長身のサーヴァント。

（完璧だ）

同じく部屋の掃除をしているかのような雰囲気のアヴィケブロンの手は、なにかの作業をしている風に見えて、その実なものしていない。

完璧だ、というのは、無貌の面の下からそつと覗き見る、かのシヴァの化身への賛辞である。その姿かたちも、てきぱきと整頓を進める手際の良さも、言葉に無駄がなく的確な質問の仕方。

書物で確認可能な範囲で彼については調べていたのだが、この短い時間でも、それらの記述の真実味を実感することができた。マハーバーラタ最高の戦士にして、カースト最上位階級バラモンの家の出、武芸と学問とを究めた聖仙。抱いた憤怒を潜めてさえいれば聡明であり理知的で、かといっていったんそれが発露したなら、びりびりと身を痺れさせるほどの凄絶さがある。

（すごい。……面白い）

非常に興味深い、極端な二面性を持つ彼が、こうして目の届

くところにくれる。その幸運に、感謝の祈りを捧げたい気分だった。

さほど意味のない動作で誤魔化しながら稀有な存在を密かに愛でる、そんな時間は、アヴィケブロン思い描くエデン、それをひたすら希求する行為に匹敵するような喜びがあった。もう少し話をしてみたいけれど、自分の会話スキルでは呆れさせてしまうかもしれないから。なんとなしに手を動かして、彼からのアクションを待っている。

「よし。だいたい片付いたんじゃないか？」

「……ああ、そうだね。有難う」

「で？ こんだけじゃさすがに悪いからな。次は、なにを手伝おうか？」

「……ああ、うん」

ニカつとした笑みと一緒に差し出される、彼の気遣いが有難い。口下手ではあるが、促してくれば伝えられる。とってつけたような片付けではなくて、本当は、本当にやって欲しかったことは。

「……君を、……君を、よく観察させて欲しいんだ」

「ん？」

「というのは、君の容姿や思考パターンが、その、新しく考え

ていたゴーレムによく合いそう。見た目だけ真似することも勿論出来るんだが、完成形への理解が深ければ深いほど、仕上がりも良くなる。……だから、その、」

「なアんだ、んなことか！ 問題ねえよ、なんでも聞いてくれて構わねえし、観察つてのは……？ なんだ、服でも脱げばいいのか？」

「いや！ いや、あの、それは、うん、そうだな……また、おいおいで……」

「まあいきなり全裸つてのもなあ。了解だぜ、アヴィケブロン」
嘘こそついていないが誇張の混ざった申し出と、幾分かの下衆な欲を隠し切れなかったへたな反応すら、アシユヴァッターマンはあっさりと受容してみせた。

「お安い御用つてやつだ」

「あ、……ああ、うん」

手を伸ばしてくる彼の仕草で、握手を求められているのだとワテンボ遅れて気付く。

ぎゅつと握られた手の力強さに目眩さえ覚えながら、それでもアヴィケブロンは必死に約束を交わした。

これから数日の間、夜に工房を訪れて欲しい、ということ。嫌な場合は嫌だと言ってくれて構わないので、少しでも身体に触れたり、話を聞くことを許して欲しいということ。「あんたの気の済むまで付き合うさ。もし良けりや、あんたの

「……！ 喜んで！」

表情は見えなくとも、アヴィケブロンの声は明らかに弾んでいる。

直後に軽いノックと、扉の向こうから呼び声がした。

「おーい、アヴィケブロン！ 私だよ。壁、直しに来ただけだ。今いいかな？」

「ダ・ヴィンチか。どうぞ。アシュヴァッターマン、君はどうする？」

「俺も残っていいか？ なんせ俺が空けた穴だしな。どうやって塞ぐのか、お手並み拝見したいところだ」

「そうか。僕は構わないよ」

そうして、空いた大穴は塞がり、散乱した書物や素材は整理され。工房内は普段通りの静けさを取り戻したかのごとく見えたが、それでも。

「じゃあ、また明日の夜に。時間はこのぐらいでいいんだな？」

「ああ。君を待っている、アシュヴァッターマン」

次への約束がある、というのは確かな変化だった。自室へと戻るアシュヴァッターマンの背中を見つめ、アヴィケブロンは無意識に、握手を交わした方の手に力を込めていた。

翌日、約束通り部屋を訪れたアシュヴァッターマンに、アヴィケブロンはこう切り出した。

「観察がてら、君の話が聞きたいんだ。勿論、資料に残しても問題ない範囲で構わないんだけど」

あくまでも、嘘ではない。実物を模倣したゴーレムを生成するにあたり、対象への理解があればあるほど再現度が高まるのは真実だった。

強いて言えば、そこまで精度を高める必要があるのか、という点に関しては、素直に回答しづらいというだけで。

「俺の話ねえ？」

そう返すアシュヴァッターマンの表情は、なんだか悪戯っ子のそれを思わせる風情だった。

「んじゃまあ……、適当でいいんだよね？」

「そうだな。君の語りたいように」

今日あった出来事、マスターとした雑談について、好きなもの、嫌いなもの。本当に思いつくまま、片っ端から喋りだすアシュヴァッターマンに、アヴィケブロンは言葉少なな相槌を打つ。

しきりにメモをとり、じゃあ今日はこの辺で、とアヴィケブ

ロンが終了を告げるまでひたすら続く奇妙なやりとりは、数日の間繰り返された。

律儀なことにアシヴアッターマンは連日やって来て、楽しそうにあれこれ話して帰っていく。

己の凝り性もたいがいだが、彼のあまりの付き合ひの良さにも感心して、特に私見を挟まなかったアヴィケブロンも、ある日ぼつりと内心を零した。

「……君は面白いなあ……」

おつ、と軽く目を見開き、アシヴアッターマンはすかさずその呟きを拾う。

「俺に言わせりや、お前さんだつてそうとう面白えぞ？ 肩にんなでつけえ棘つけてる割に、構つて欲しそうにしてるし」

面食らつたのはアヴィケブロンだった。びっくりして固まつてしまつたのを見て取つて、アシヴアッターマンはくすくす笑っている。

「……僕は、構つて欲しそうに見えてるのかい!？」

「それなりにな」

ニツと浮かべた笑みには、嫌味など一切ない。情熱的でまっすぐな、いつも通りのアシヴアッターマンだった。

「いいじゃねえか、別に！ 迷惑かけたからな、気の済むまで付き合うさ。あんたも、俺じゃ不都合つてわけじゃないんだろう？」

「勿論だよ」

コミュニケーション能力に乏しい、というより、一応人並みにコミュ力はあるのだが、それを發揮するだけのモチベーションが異様に低いアヴィケブロンにとって、ここまで会話が成立するのも稀だ。

そうして、それが、決して居心地の悪い時間ではない、という感覚も。

「……少し、込み入つたことを聞いてもいいかな」

ようやく生まれた信頼関係に自分から一步踏み出そうと思えたのも、もしかしたら初めてなのかもしれない。

自分の我儘をきつと受け入れてくれるだろう、いや、受け入れて欲しい、という密かな願望のままに、アヴィケブロンは言葉続ける。

「君の怒りの根源について」

「ああ……」

聡い男はたつたそれだけで、問いかけの内容を察したようだった。

英霊として現界した自身の、根幹を成す部分。靈基に深く刻まれている、他者の血にまみれた傷痕。

「無論、君にはこの話題を避ける選択肢がある」

「いや、いい。隠しごととは好きじゃねえんだ」

確かにそれを知らずして、己の在り方のなんたるかを理解するのは困難だろう。そう考えて、アシュヴァッターマンは口を開いた。

「俺は……。卑怯な手段を用いて、無防備な人間を何人も殺した。禁忌であった、夜襲をかけたんだ。眠っている女も、幼い子供もいた。痛みも分らないうちに、みな絶命させた。すべて、この俺がやったことだ」

しんと空気が冷える。

アシュヴァッターマンは椅子に腰掛けていたが、前傾姿勢を深めたので、垂れた前髪がその表情を隠していた。

「逸話によれば、先に向こうから禁じ手を使ってきたのだろう？」

「そうだ。ゆえに俺は激昂し、さらにその上をいく卑劣なやり方で復讐を遂げた」

「しかし、怒りは消えなかった？」

「……その解釈は半分正解でもあるし、間違いでもある。俺は復讐をした。だが、それは完全ではなかった。状況は好転しなかった。だから怒りが消えなかったと言えなくもないが……。そもそもその怒りは、この霊基の核になった怒りとは別物だ」

「では、今の君の核になっている怒りとは」

「俺自身に対する怒りだ」

「ふむ」

さらさらと、ペンが走る音だけが響く。

張り詰めた糸のような静けさで、アシュヴァッターマンは続きを語った。

「経緯はどうあれ、俺はあるべき道に背いた。だから俺は怒り続ける、蛮行を働いた俺自身に対して」

「……つまり、過去の誤った行為を悔やんでいると」

「ああ、それは違う。悔やんではない。恥じてもない。俺は俺である限り、あの場面にあれば、同じように振舞うだろう。だが、そんな俺自身を怒らない俺もいない。どちらも矛盾せず、憤怒のままにあり続けるんだ」

「恥じ入るわけでもなく、許しを乞うでもなく。……ただ自身自身に対する正当な状態として、己に怒り続けるということかな」

「そうだ。そうしてその怒りが、かつての俺のような、理不尽な立場に置かれているやつ力の力になればいい。俺は、アシュヴァッターマンは、そういう在り方の英霊だ」

「……自罰的だが、前向きだな。なるほど、非常に斬新だ」
トン、と筆先を止めて、アヴィケブロンが言う。

「話してくれて有難う。君への理解が深まったよ」

「そりやよかった。また気になつたらいつでも聞いてくれて構わないぜ」

そう返したアシュヴァッターマンの表情からは、先ほどまでの緊張感は消え失せていた。穏やかな微笑に誘われるみたいに、アヴィケブロンは口を開く。

「次は君をスケッチしたいな」

「スケッチ？」

「写真だとか映像だとか、便利な機械もここにはたくさんあるようだがね。自分の手で描き残すのが一番なんだよ、僕にとつては」

「へえ、意外。あんた、絵も描くのかい？」

「そんな大したことじゃないさ。芸術的な価値はほぼないけれど、写実性はそこそこに。僕もそうだが大抵の魔術師は、イメージを具現化する手段をいくつか持っているものだよ」

「そういうもんかあ」

「うん。じゃあ、今夜はこの辺で。今日も有難う、アシュヴァッターマン」

じやれるように会話しながら、部屋の出口まで一緒に歩く。「そんじや、また明日な。絵が描けたら、良かったら見せてくれよ。あんたから見た俺がどんな風なのか、見てみたいんだ」

「……了解した。これは随分とハードルが上がったな」

「んなこたねえよ！ いつも通りのやつが見たいんだ」

笑って手を振るアシュヴァッターマンの背を、アヴィケブロンはじつと見つめて見送った。

「……だって君は、途方もなく美しいじゃないか」

零した弱音は小さく、誰にも聞き取られずに掻き消える。そのくせ余韻は妙に甘くて、アヴィケブロンは無意識に、ほうと息を吐いていた。

アヴィケブロンの要望を受けて、その後数日はひたすらスケッチをする日々が続いた。全身像はもちろん、パーツごとに描いたり、再臨状態を変えて描いたりと、どんどん枚数が増えていく。

今夜もそうやって過ぎるかのように思われたが、少しだけ様子が違った。ずつと黙って写生に付き合っていたアシュヴァッターマンが、感心した風で口を開いたのだ。

「熱心だなア」

「素晴らしい素材が目の前にあるからね」

普段通りのアヴィケブロンであれば、集中が削がれるから静かにしてくれと注意でもしているところだ。けれど彼が返したのは、紛うことなき純粹な賛辞だった。

仮面の奥の感情を汲んで、アシュヴァッターマンは言葉を重ねた。

「描くだけでいいのか？」

「描くだけ、とは？」

質問の意図が読めず、アヴィケブロンは小首を傾げる。いかにも博識な魔術師が子供じみた仕草をするのを見て、アシュヴァッターマンは悪戯っぽく目を細めた。

「そろそろ、実際に触ってみたらどうなんだ」

「あ……」

「その方がよく分かるんだろ？」

挑発する視線に、アヴィケブロンは戸惑う。なめらかに進んでいた筆も止まり、意味もなく握り直すばかりだ。

「いや……、申し出は有難いがしかし、僕の爪では……。君を

傷つけてしまうかもしれない。やはり、そんなことは出来ない」

「……あんた賢いのにそういうとこ……、まあいいや。そんなニョキニョキ腕生やせるんだからさ、ちっと靈基の仕様変えるくらい朝飯前だろうよ。だし、それ以前に俺は戦士だぞ。ひっかき傷なんて、傷のうちに入らねえって」

「だが、」

反論しようと見上げた先でアシュヴァッターマンの表情を認め、ぎくりとアヴィケブロンは固まった。不要と判断した相手には無視を決め込むことも躊躇しない詩人が、あからさまにうろたえている。真摯で、優しく、そしてどこか艶を感じさせる顔つきでこちらを見ている愛しの彼から、どうやって目が逸らせない。このままでいるのは良くないと分かっているのに身動きもとれなくて、仮面の下に隠された眉がぎゅっと寄る。

「触りたくないのか？」

「いやそういうわけじゃない」

「じゃあ触ってみたいか？」

「……………」

とうとうアヴィケブロンは押し黙ってしまった。触ってみたくない、わけがない。一目見たときから、もっと彼を知りたいと思っていたのだ。知りたい、というのは、それはもう、様々な意味で。なんなら性欲に近いものだって抱いていたが、相手

は同性であるし、そもそも他人にそんなことをするなどアヴィケブロンにはまるで考えられなかった。

己が造ったゴーレムにならまだしも、生きた人間に、不埒な行為をするだなんて。人並みの気遣いすらまったくできない男の観察対象になってくれただけでも、まさしく僥倖だというのに。

「あんた人嫌いだって自分のこと言うけど、言葉が足らなすぎろぞ。害されたり害するのが嫌なだけで、本当は触れてみたいんだろう。じゃなきゃ、民族のための樂園なんて望んだりしない」

「僕のこと、調べたのかい」

「お互い様だろ。知りたがりのあんたの真似っこをしたのさ」
やけに饒舌なアシュヴァッターマンは、ちつとも悪びれずにそう言う。参ったな、というアヴィケブロンへの態度は、黄金のマスクがあつたところで誤魔化しきれるものでもなかった。

「いいか？ 俺はあんたよりも間違いないし、頑丈なんだ。傷つけるよりも、むしろそつちが傷つく方を心配するべきだぜ」

「……だが……」

「あんたが不器用なのはなんとなく分かった上で言ってるんだ。そんであんたの好奇心、それを俺はいいもんだと感じるし、満たしてやりたいとも思ってる。なんだよあんた、俺の頼みが聞けねえってのか？」

「……な……！」

次の言葉が出てこない。アシュヴァッターマンの論理構成は完璧だった。あえて言うなら、なぜそんなことを望むのか、それで彼にどんな得があるのかという疑問は湧いたが、そこを追及する気にはなれなかった。これまでのアヴィケブロン生き方からすればその点を明らかにするのは限りなく無意味だったし、今のアヴィケブロンにしても、非常に恐ろしいことだった。

「……分かった、僕の負けだよ。君は本当に、色々な意味で強いな……」

よって、詩人は素直に白旗を上げた。彼にしては珍しく、答えを出すことを諦めたとも言える。

「だろう！ 至尊の戦士たあ俺のことだ！ さあどこからいく？」

「ど、どこからってそんな……」

おろおろするアヴィケブロンの様子を、アシュヴァッターマンは余裕の表情で見守っている。

「じゃ、じゃあ、そうだな……。ああ、その、髪……。髪に触つても、いいだろうか」

「好きにしな」

そう言うアシュヴァッターマンは、ゆるく微笑んだまま瞼を閉じてしまった。どうぞ、と顔を差し出され、アヴィケブロン

ンは戸惑う。本当に触れてもいいものなのか、と怯える指先を、アシュヴァッターマンはただ待っている。必ず触れてくるものと信じて疑わない姿勢に退路を断たれ、アヴィケブロンは霊基の変更を余儀なくされた。席を立ち上がり、椅子に腰かけているアシュヴァッターマンへと歩み寄る。その間に、鋭い爪は先端が丸められ、やや人間のそれへと近づいた。

震える指で、アヴィケブロンは、夕陽の色をした前髪を梳いた。それは絹糸のようにひとがたの指をすり抜け、する、と滑っていく。

「どうだ？」

「す……、すごくいい……。僕の髪と全然違う……」

興奮すると語彙が貧弱になるのは、アヴィケブロン癖のひとつだ。あんなに恐れていたわりに一度触れてしまうと、欲に歯止めが効かなくなる。促されるまま髪から頬へ、鋭角を失った爪がたどった。

「温かい、な……」

「おう！ どんどんいいけ！」

声援を受けて、少し手の動きが大胆になる。首筋から肩まで撫でて、胸に至るあたりでようやく我を取り戻し、躊躇した。けれどそれを許さずに、アシュヴァッターマンは自ら、金色に輝く異形の手を取る。

「アシュヴァッターマン！」

「本人がいつつてんだろーよ」

胸から腹へ、アヴィケブロンの手を、アシュヴァッターマンが動かしていく。よく鍛えられた体幹の筋肉に触れて、それからさらに下へ。いよいよ腰へ辿り着こうというところで、アヴィケブロンが情けなく声を上げた。

「ア、アシュ、アシュヴァッターマン……！ もういい、もう、よく分かったから……！ ここから先は本当にいけない、その、良くないと思うよ、いくら君がいいと言ってくれたって……！」

「！」

躊躇うのは、他人のそこに触れる意味を考えてしまうからだ。同性同士気にするのではないと、そう思いきれないからだ。もしも今、やましいことを考えているだろうとはつきり指摘されたなら、アヴィケブロンは全力で逃げ出して、カルデアを去っていただろう。ただ、アシュヴァッターマンはそうしなかった。甘えるような目をして仮面の男を見つめ、たったひとことこう言ったのだった。

「俺のことを、理解してくれるんじゃないのか」

へなへなへな、と、音が出そうなくらい見事にアヴィケブロンがへたりこんだ。

「……君ってやつは……!」

「ははは。どういう意味だ?」

「いや、その……。なんでもない、とにかくそうだな、僕の完敗だよ……」

床に座り込んでしまったのを引つ張り上げられながら、アヴィケブロンは完全敗北を宣言した。がはは、と笑われてしまったが、気分はさほど悪くない。むしろ、高揚していると言った方が正しいくらいだった。

「……君の望むままに。君が触れて欲しいと思う場所全てに、僕の指先を走らせてくれ」

そう言葉にしてしまってから、アヴィケブロンは背徳感に身震いをした。皮膚病によって醜い外見をしていたことから、人々に忌避され続けた己が、こんなに美しいものに触れてよいものか、と。

「分かった」

そんな胸中を知ってか知らずか、アシュヴァッターマンは楽しげだ。立ち上がってアヴィケブロンに向かい合い、しっかりと彼の手を掴む。何本もの金属の指で肌を撫で、へその近くへ、そして股間の際どいところへ下りていく。

「!」

びくとアヴィケブロンがびくついたのは、直に内股の体温を感じたからだだった。そこは確かに鎧のようなパーツに覆われていたはずなのに。どうしてかなんて問うまでもない、本人がその意志で霊基をいじり、アヴィケブロンに触れているあたりだけ、部分的に肌を露出させたのだ。

「ん……っ、はは。あんたの指、冷てエ」

「~~~~~~~~……っ!!」

すると滑らかな手触りに、アヴィケブロンはもう声も出ない。直接当たりこそしなかったが、すぐそこに彼の性器があつて、ひよつとしたら指が触れてしまうかもしれないと思うだけであつた。太腿の付け根のラインをなぞり、存外柔らかい内腿の肉を揉まされて、それは甘美な拷問のようだった。生前から性に疎かったアヴィケブロンだからこそ、その衝撃は尋常ではない。ああ、これは駄目だ倒れそうだとふらつきだす一歩手前で、ようやくアシュヴァッターマンが解放してくれた。かなり身長差があるゆえに目が合わないことを安堵したのも束の間、彼は膝を曲げ、強引に視線を合わせてきた。

「んで、ご感想は?」

「……………」

口を開けるわけもない。なにより呼吸を整えるので必死だった。うつかりすれば取り返しをつかない失言をするかもしれず、頭の中はとっ散らかったままだった。

「なんだよ、思ったよりつまんなかったか？」

「……ッ、君は酷い男だ……！」

言い返すことで、ようやく己を取り戻す。ゲラゲラと豪快に笑うアシュヴァッターマンを見ると、本心を隠してばかりいるのが急に恥ずかしくなった。開けっ広げな彼にもっと近づきたいという思いが、アヴィケブロンに行動を促す。

「……すごかった。温かくて、滑らかで、……気持ちが、良かった……」

「そりやどうも」

子供のような言い回しになっても、ばかにしたりしない。それどころかアシュヴァッターマンは、アヴィケブロンへと両手を伸ばしてきた。

「じゃあ今度は、あんたのことも触らしてくれよ。服の上からでもいいからさ。その細っせえ腰、いつたいたいどこに中身が詰まってるんだ？」

さわわ……、と色めいた手つきで腰を撫でられ、驚いたアヴィケブロンが思わず仰け反る。

「君、僕をからかっているだろう！」

「つはは！ すまん、すまん！」

スケッチを続けるでもなく、その夜はそこで解散となった。

「んじや、また明日」

「……う、うん……」

もう幾度も繰り返したやりとりだが、飽きることなんてまったくなく。また来てくれるんだ、と思えば思うだけ、胸がじわりと温かくなるのをアヴィケブロンは感じていた。

初めて身体に触れさせてもらったあの日から、同じような夜を何度か過ごした。彼に触れるだけでも昂ってしまうのに、彼の方からもアヴィケブロンに触ってくるのだからどうしようもない。

「はあ……」

日課だったゴーレム研究も手につかなくて、仮眠用のベッドに潜り込んだ。

身体が熱い。

熱が収まらない。

英霊として現界するにあたり、いらないものだからとペニスを排除してしまったので当然の帰結だった。

これまでなんの不自由もなかったのに、アシユヴァッターマンを想うと性的な欲求が止まらない。悩みに悩み、恥を忍んで、とうとうアヴィケブロンは男性器を復活させることにしたのだった。

「きちんと動けばいいのだが……」

ベッドの脇の引き出しの奥、しまい込まれたデイルドを手取る。

衣服ぐらいなら容易いけれど、身体を改造するとなるとそれなりに骨が折れる。だからこそ生前の肉体を模したかたちでマスターの前に現れるのであって、好きな顔や体型で次なる生を謳歌できるわけでもないのだ。

アヴィケブロンの場合、英霊としての在り方がゴーレム生成以外の能力を極端に削っていたので、なおさら難易度が上がってしまうのだった。えいやつと性器を生やすことができるので

もない以上、研究者としては現実的な解決策を選ばざるを得なかった。つまり、複腕と同じ要領で、疑似的な陰茎を霊基に融合させ、己のものとして動かせるようにする、という方法だ。

「うーん……」

というわけで、ゴーレム製造のノリで作り出した疑似男性器が今、アヴィケブロンの手の中にある。生前のそれを思い出しつつ作ってみたのだが、なかなかに情けない心境だった。

「まあ、やってみるか……」

気乗りこそしないものの、試作品を放置することなどできない。作り手の矜持として、テスト機が完成したのなら、動作確認をせねばならない。なかば脅迫的な観念に背を押され、アヴィケブロンは疑似性器に霊力を通わせた。ベッドに座ったまま布団にくるまって身を隠し、股間に神経を集中させる。

「できた、か……？」

まばゆい光を放ったそれは、吸いつけられるように肉体へ混じり、見た目としては融合を果たせたようだった。ただ、腕の

場合は動けばオーケーだが、それがペニスともなると。先々の使用予定も踏まえたうえで、さらなる確認が必要だった。はっきり言うなら、勃起して、射精できること。それらは絶対条件だ。

「射精……、……」

ゴーレム生成に関しては出すことのない、気弱な声が喉奥から漏れる。久しぶりに見た己の陰茎や陰囊に懐かしさはあっても、自慰に関してそんなものは皆無だった。なぜなら、経験がないのだ。まだ人間であった頃には恋もせず、性欲も薄かったのだ、自慰をしたことがない。一般的な知識は持つていても、実行に移す必要性を感じていなかったのである。

「なにか、思い浮かべながら……、刺激するんだったか……」

上掛けのなかで、ひとりごちる。霊基を変更して、鋭い爪を消し生身の手を露出させた。おそろおそろの竿に触れて、考えるのはもちろん彼のことだ。彼以外に性欲を抱かないのだから、そうする以外に方法はなかった。

「……♡」

久々の己の手で、陰茎をこする。やり方がよく分からないので、動きがどうもぎこちない。けれど爪越しでない肉の感触というのはいのほか悪くもなく、なら、この手で直接彼に触れさせてもらえばよかったと後悔の念まで湧いていた。そんな自身を浅ましい、と恥じながらも、指先が踊るのを止められない。

「……ふ、う……♡」

艶めかしい褐色の肌、生命の猛々しさを閉じ込めたような隆起する筋肉。性器にごく近い内股の質感を思い出して、身震いをする。ペニスをしごくアヴィケブロンの手が、速度を速めていく。

性に疎い自分ですら、甘ったるい息が漏れるのだ。きつと人並みの経験を経てきたであろう彼は、こういうときどんな風になるのだろうか？ アヴィケブロンは愛しいひとに触れ、快感に善がらせるさまを思い描く。かのひとの信念の強さを思わせるあの眉が苦しげに寄せられて、唇が悩ましい吐息を――。

「……あ！♡ アシュ、アシュヴァッターマン……♡！♡」

名を呼べば、よりいっそう鮮烈な快感が弾ける。手の中のペニスがびくびくと脈打ち、二度、三度と断続的に精液を吐き出していくのが分かった。

「……は、……はあ……っ♡」

なるほど、たしかに、きもちがいい。

思考がやたら幼くなつたのを感じながら、乱れた息を整える。粘りけのある体液を受け止めた手が気持ち悪い。身体の内を落ち着かなくさせていた肉欲が発散されると、急に冷静さが戻ってきた。

(……僕は。なんてことを……)

こういった話題には詳しくないが、誰かを自慰の対象にすることが不道徳であるという認識はあった。今後どんな顔をして彼に会えばいいのやら、未知の経験に、賢人はひどく戸惑っていた。

それからすっかり自慰を覚えてしまったアヴィケブロンが居心地悪そうにしている、アシュヴァッターマンは足しげく工房に通っていた。

例のスキンシップ的なものも相変わらず続けられている。アヴィケブロンも毎回遠慮する様子を見せるのだが、さあ、さあ、と想い人から促されれば、断りきれぬはずもない。

なんなら、皮膚病だった頃と見た目が同じだからと伝えたのに、とうとう素手でアシュヴァッターマンに触れさせられてしまった。爛れたあとのある引きつれた皮膚を見ても彼はなにとも言わなかったし、かさついた指先の感触にすら文句を言うでもない。ただうつとりと目を細めるだけなので、アヴィケブロンは恥ずかしくて嬉しくて、仮面の下で赤面し、唇を噛み締めていた。自分が今どんな表情をしているのか、まったく全然分らない。

「俺のことはだいぶ理解してもらえたらどうかなアと思うけどよ」

「……あ、ああ……」

「あんたこそ、俺に話したいことはねえの？」

「……っ！」

言葉に詰まる。息を呑む。話したいことはなかったのだ、つい、ほんの先ほどまでは。

「……アシュヴァッターマン……」

「おう。なんだ？」

彼なら受け入れてもらえるのではないか。いや、受け入れてもらえなくてもいい。ただただ、知ってもらいたい。アヴィケブロンという、間違いだらけの道を歩んできたゴーレム狂いの生きざまを。そうだ、誰かに知って欲しかったのだ。今まで誰一人、そう思うような相手が見つかっていなかっただけで。

自身の人生に欠けていたなにかに気付いたなら、もう引き返せるはずもない。アヴィケブロンは熱に浮かされるように、唇を開いていた。

「では、僕の……。僕の、罪の話を……」

「ああ」

アシュヴァッターマンは静かだった。けれど張り詰めているのではなく、たとえるなら、穏やかな波のようだった。包み込むみたいなたたえられた静けさには、冷たさと温かさが同時に存在している。激情家の面を知っているにも関わらず、アヴィケブロンには、その静けさこそが彼らしいとすら思っていた。

「……我が民族はひどい迫害を受けていた。僕は知識と人の縁に助けられたが、同胞たちはみな悲惨な結末を迎えていた。いわれない中傷、そこから起こる貧しさゆえの愚行、さらに激化する差別……。解決の糸口さえ掴めない永続機関がそこにあるようだった。誰にも、どうすることも、もはや出来なかった」

「……」

アシュヴァッターマンは黙ったまま、こくりと頷いた。

「そして僕自身も、決して楽とは言いきれない日々を送っていた。直接向けられはしないだけで、僕の民族、僕の病、僕の気質……。すべては常に否定され、拒絶をされ続けてきた。ときには研究の成果を握りつぶされたこともあった。だから、僕は孤独を唯一の友として、そんな毎日からの救済を求めているんだ。究極の楽園。争いのない、平和な世界を……」

アヴィケブロンが遠くに目をやる仕草をする。その姿があまりにも悲しげで、見ているだけで胸が苦しくなるようだった。黄金の仮面越しに目線が戻ってきて、それから所在なさそうに、いたたまれない風で足元を見つめる。

「とある聖杯戦争での話だ……。僕は十分な後ろ盾を得て、ついに楽園の扉の鍵を手中にしていた。原初の人間、アダム——、それを模倣した宝具を造りだした。大地の祝福を受け、世界を塗り替え続ける楽園そのもの……。ゴーレム・ケテルマルクト。僕はようやく、その器を生み出すことに成功したんだ。あとは、適性のある炉心さえ見つかれば。そうすれば、楽園はもうすぐそこだったんだ……」

「……」

アシュヴァッターマンは首肯で応じたので、奇妙な沈黙がその場に流れた。辛抱強く待っていると、再びアヴィケブロンが

語り始める。

「……お察しの通りだよ。最初は、ホムンクルスを使おうとしたんだ。だが色々あつてね——。最終的にそのときの僕は、僕のマスターを利用した。まだほんの小さな、善悪も分からない年のこどもを」

「……そうか……」

サーヴァントとしてのプライドも、人間らしい倫理観も、どちらも投げ捨てるような凶行。目の前の理知的な彼がそれを為すのに、どれほどの苦悩があつただろうか。

卑劣なやり方への復讐として殺戮を行った我が身を重ね、アシヴァッターマンは相槌を打った。絞り出すような声で、それでも、きちんと聞いているぞということを伝えるために。

「……人類が楽園に至るためには……、犠牲も、厭わないと思つたんだ。そのときは……。ただ、今となっては、分からない……。僕はマスターを生贄に、楽園を生み出そうとした。そしてその結末を見ずに、戦いを脱落した。……あとから聞いた話では、敵対するサーヴァントたちによって、あの宝具は破壊されたらしい。……あと少し遅かったら間に合わなかった、と、彼らは言っていたけれど……」

「……」

アヴィケブロンが視線を彷徨わせる。じつと見つめていると、ようやくそれが重なった。見つめ合つたまま、彼の言葉に耳

を澄ませる。

「……未だに平和は訪れていない。楽園はどこにもない。あの小さな少年のいのちを糧にして、僕は……。僕は、どこへ行こうとしていたんだろう……。？ ああするしかなかった。ああしても駄目だった。しかし間違ひなく、あれは誤りだった。彼は、僕に捨て駒にされたあの子——……！」

瘦せた手が、紡ぐ音が震え、心のうちを曝け出す。

他人を退けるかのような異形の容貌で現界した魔術師の、一番柔らかい部分が今、己の目の前にある。

変わりのない静かな瞳で、アシヴァッターマンはアヴィケブロンを見ていた。

「——何より残酷なのは、僕はあの子のことを、留めておけなかったということだ！ 霊基に刻まれているのは事実だけだ。あの子を使つてしまったという僕の過ちだけなんだ。僕を師と慕つていたはずのあの子のことを、この僕はなにひとつまともに覚えちゃいないんだ。本当に、なにひとつ。姿も顔も声も、ぼんやりとしていて……。！ なにも、なにも……！」

我を忘れ、叫びそうになつていたことに気付いて、アヴィケブロンははつと息を呑む。叱られる寸前の子供のような姿勢でうなだれて、それからのろのろと目線を上げた。

そうして見やった先に変わらず話を聞くアシュヴァッターマンの姿を認めると、苦しそうに、けれどもはつきりと、言葉を続けていく。いたたまれない様子で、再び視線を足元へやっ

た。

「……どうしてせめて彼を覚えていてやれないのか。その答えは、明白なんだ……。僕が、それを……。抱えきれないからだ。

僕という浅はかな英霊は、楽園のための犠牲になつた彼のいのち、そこに宿つていた人格、それを自らが殺してしまつた重みに耐えられないんだ……。僕が殺した。どんな髪色の、どんな背丈の、どんな声色かも知からないことを……。そういう風にしなければ、僕は英霊であることすら出来なかつたんだろう。おそらく僕は、僕の知り得た彼の一切合切を打ち捨てることで、英霊の座に縋りついたんだと思う。僕は彼を二度殺した。実質的に殺し、記憶の中ですら抹殺した。徹底的に彼を無意味にした。アシュヴァッターマン、僕は――」

一息に喋り続けてから、アヴィケブロンはようやくアシュヴァッターマンの目を見つめた。詩人は言葉を探し、持ち上げた両手をかすかにわななかせている。

「ああ」

なによりも雄弁なその姿へ、アシュヴァッターマンは応えた。かたちなどできるはずもない感情が、瞳と瞳を通じて交わされる。漠然と、自分たちは繋がっている――という心地が戦

士の胸に湧いた頃、アヴィケブロンはとうとう、彼なりの結論を吐露したのだった。

「僕は。――僕は、僕を、許せないんだ……！」

「――そうか」

立夏であれば、許しただろう。今後は過ちを繰り返さないようにしよう、と言つて。子供を愛するサーヴァントであれば、アヴィケブロンを罵つたかもしれない。お前は偽善者だと言つて。けれど、アシュヴァッターマンはそのどちらとも違う反応をしたのだった。

「――ならば俺は、ともに怒ろう。あんたの罪を、そうさせた運命を。そうして俺の罪をも、怒つて怒つて、怒り尽くして――、マスターたちと、ここで出会つたサーヴァントたちと、怒りの先の未来へと、憤怒の炎を届けてみせる。それが俺だ。アシュヴァッターマンの生き方だ」

静かに、穏やかに。しかし凜として、決然とした声が響く。アヴィケブロンは言葉を返すことができなかった。胸のなかで

生じた気持ちをどう表現したらよいのか、まるで分からなかったからだ。それどころか身動きすらとれずに、呆けたみたいにアシュヴァッターマンを見つめている。

「……………」

「そんな在り方は嫌か？」

「いや……。いや……。いや……！」

問いかけられて、やっと声が出た。

彼の持つすべての語彙をもつてしても、この瞬間に味わった感動を表すなんてできなかったのだ。

あんなにむごいことをした悪人を、君は。

許さず、罵倒もせず、ただ共にあって、共に怒ろうと言ってくれるのか。

意図して抱えた矛盾に苦しむ、自業自得の男の傍らに、君は立とうと言ってくれるのか。

それでは、僕は。

この苦しみを座に刻み、何度喚ばれようとも己の蛮行にうめくことが決定づけられた僕という英霊は。

君が傍にいてくれる限り。

(……………孤独ではない、ということか……………!?)

生前はもちろんサーヴァントととなってからも、アヴィケブ

ロンは独りだった。親友ができて、仲間が増えても、癒されこそすれその認識が変わることはなかった。

真に彼の求める存在が、そこにはひとりもいなかったからだ。アヴィケブロンの傲慢を、気高さを、不器用さも。なにもかもを、彼の望む距離で、受け止めてくれる存在が。

それはまさにエデンのようで、がむしやらにそこへの到達を希求する一方、きつと叶わないであろうことを頭の隅で常を感じずにはいられないものだった。きつと樂園は生まれえない。きつと平和は訪れない。きつと己は愛されることはない。きつと己は、誰も愛することができない――。

だがどうだろう。今も信じられないが、目の前に、確かにそのひとは在るのだ。瞳も髪も燃えるような激しさがあるのに、彼はただじつと、抱擁でもするかのようにアヴィケブロンを見つめている。

賢者の頬をひとすじ、涙が滴り落ちた。

仮面をつけていてよかったと、こんなに思うこともそうないだろう。やつとの思いで気持ちを伝えてみたならばひどく声が震えていて、ぜんぶを台無しにしたけれど。

「アシュヴァッターマン……、僕は、きみが。きみが、好きだ……。僕には君が必要なんだ。だから、どうか、どうか……」

「ああ、知ってる」

そうなのか!?と肩を跳ねさせて驚くアヴィケブロンに、アシュヴァッターマンはくつくと笑った。決してばかにしているのではなく、可愛くて仕方ない、と言いたげな表情だった。

「気付いてたし、知ってるさ。なんなら待つてたくらいだからな。そして俺の答えはこうだ——。……あんたの犯したその罪ごと。俺はあんたの、すべてを愛そう」

求める以上の完璧な返答を受け、一瞬気が遠くなる。おい、と呼びかけられて、ようやく意識が宇宙空間から舞い戻ってきた。放心状態からの帰還芸にまたアシュヴァッターマンがけから笑って、アヴィケブロンは思わず黄金のマスクを両手で覆い隠したのだった。

「君、君は……! 君ってやつは、あまりに格好良すぎる! なんなんだ僕の体たらくは! 消えてしまいたいくらい恥ずかしいよ!」

「両想いになった途端に消えるだなんて、ばか言っちゃいけないなあ!? これから俺たちは一緒に、笑って、怒って、愛し合って、この霊基を生きていくんだろう?」

「あああああ……!」

一緒に、だの、愛し合って、だの、手が届かないはずだったフレーズが山のように降ってくると、アヴィケブロンは卒倒してしまいそうになる。倒れかかった瘦身を胸に引きよせ、アシュヴァッターマンは言った。

「憤怒の化身であるがゆえに、怒りへの共鳴は想定内っちゃ想定内だったんだが……。甘やかしまくりのマスターの影響かあ? 疼くんだよなあ、身体の奥が……! “愛する者”とかいう属性が、どうやら俺にはあるらしい。ダ・ヴィンチちゃんとやらがそう説明してた」

「“愛する者”……」

愛情深いマスターによって呼び出された英霊が、その魂の影響を受けるなんてことがあるのだろうか? 新たな問いは立

ったが、アヴィケブロンにしては珍しく、手を付ける気にならなかった。アシュヴァッターマンとの間に感じるもの、それがおそらく愛なのだ、という確信だけでもうすでに十分だったのだ。立夏との縁による産物なのか、さもなくば聖杯の意思なのか——。そんなことはどうでもよかった。アヴィケブロンはアシュヴァッターマンの腕に抱かれたまま、歓喜に揺れる指先でその輪郭をそつとなぞる。屈強な戦士へ、壊れやすいものでも扱うかのように繊細に触れた。

「アシュ……、アシュヴァッターマン。君を、……君を、愛し

てる……。詩人のくせして、なんてことだろうか。即興で詩を編むべきだろうに、君のことで頭がいっぱいなんだ……」

「大丈夫、たいした口説き文句だぜ！ 俺の頭ん中だって、今はあんたでいっぱいだ。あんたは賢い、面白い。人嫌いだってのに人間臭くて不器用で、構ってやらずにいられない」

「アシュヴァッターマン……！」

互いを確かめるみたいに、ぎゅつと抱き合う。もつと触れたい、彼を直に感じたいという強い衝動が込み上げてきて初めて、身に纏った棘や仮面が邪魔だと思った。必要だったから用いてきたそれらが、煩わしく感じられる日が来るだなんて。

「……俺たちはサーヴァントだ。マスターに従い、戦う責務がある。……だが、そこを全うできるなら……。この霊基の俺は、生涯あんたと共にあろう。アヴィケブロン、あんたの伴侶に。この俺を、選んでくれないか」

「勿論だとも……！ 君が、君こそが、僕の探し求めていた――
――……！」

そのあとは、嗚咽になつて続かなかつた。

救済の楽園を求めるあまり、罪を犯したこと。その罪に苦しみ、今日までやってきたこと。そうして彼に、アシュヴァッター

マンに出会い、生まれて初めて満たされるということを知つた。

罪こそが巡り巡って孤独を埋めたのだ、という皮肉をどう受け止めていいのか、今はまだ分からない。楽園を求めさえしなければ罪を犯すこともなく、こうして彼と抱き合うこともなかったのか。だとすれば、真の幸福とは、はたしてどちらの道だったのか。

「アヴィケブロン……」

迷走し始めた思考が止まったのは、アシュヴァッターマンから口付けられたからだだった。顔全体を覆うマスクがある以上仕方ないのだが、額のあたりでちゅう、とリップ音が聞こえたときには、ものすごくもったいないことをしてしまった気分になった。

「アシュヴァッターマン……」

「ん？ やりすぎちまつたか？」

「いや、違う。違うんだ……」

キスがしたい。仮面を脱ぎ捨てて、荒れた肌を曝して、彼と裸で抱き合いたい。これまで、ああすべきだ、とか、こうしな

くてはならないのだ、と考えがちだったアヴィケブロンだったが、未だかつてないほどに、こうありたい、という自然な欲求が湧き上がっていた。

変わりたい、変われそうだ、否、もう変わり始めている——。不思議な高揚に促されるまま、抱き合う腕に力を込めた。

「……もつとか……？」

「うん……」

「そうか」

短いやりとりさえ、爆発しそうな愛しさが募る。抱き締め返してくれる、逞しい腕が頼もしい。己の細い身も弱さも、彼ならきつと受け止めてくれるのだらうと、素直にそう思えてしまう。

「アシュヴァッターマン……！」

ならばこちらは、得意の詩を送ろう。

自身の死の一因になった才能を、彼のためにふるおうと思った。今はまだ、愛してる、以外の言葉が見つかりそうもなくて、とても聞かせられないけれど。

気合いを入れすぎて大長編になってしまおうが、やたらに制

作期間が延びてしまおうが、このひとはおそらく、いつでも笑って受け入れてくれるのだらう。

いつか必ず訪れるであろうそのときを思って、アヴィケブロンはかすかに微笑む。

それは、きつと。夢に描いた楽園へ至るよりも、きつとずっと、すごく、近い——。

「……という具合なんだよ、立夏」

「だ、大恋愛じゃないかアヴィケブロン……っ！」

かなり、特にふたりの過去についてはさうとう端折って話したが、それでも立夏にはじゅうぶん伝わったようだった。ハンカチ片手に涙を拭っている姿を見て、アヴィケブロンはほうと息を吐く。

「はは。長くなってすまないね。こんな話の出来る友人が、君以外にはいないんだ」

「いいよ！ どんどん言っていよいよ……！！ アヴィケブロン……！！ 本当に良かった、アシュヴァッターマンに巡り会えて、

本当に……！！」

立夏がずびーつと鼻をすするのを、アヴィケブロンは黙って見ている。少し照れくさそうにして、少年は笑った。

「あー……、じゃあ、これが聞いて欲しい大事な話ってやつだったんだね！ いやもう本当に……、」

「違う、そうじゃない」

「え？」

「半分は正解だが、もうひとつあるんだ。聞いて欲しい話」

「あ……、ああ、そう！ ごめんね早とちりして！ どうぞどうぞ、俺でなければいくらでも……！」

「有難う」

札を言うと、アヴィケブロンは黙り込んでしまった。仮面越しでは表情も窺えないが、とにかく喋ってくれるのを待とうと立夏は唇にきゅつと気合を入れる。

「立夏。君、セックスの経験はあるか？」

「ほへ!?」

突然の問いかけに、立夏はぼんつと赤面した。ドラマのようなラブストーリーから一変、現実視点に引き戻される。

「あ、すまない……。この流れだと誤解するな。勿論 異性とのそれで構わない。経験があるなら、是非話を聞きたいんだ。なにせ、僕はしたことがないものだから」

「あ、あ、あの、その、えっと……！」

「立夏？」

「……あ、うん、ごめん、俺もその、童貞だからさ……。それに関しては力になれそうにないや」

立夏はしゅんとしよぼくれた。アヴィケブロンはふむ、と小さく頷いている。

「そうか……。君が分かるのであれば助かるなと思ったのだが……。僕と彼とが同性同士ということもあるんだけど、そもそもどういう姿勢で性交に臨んだらいいかが、僕にはまったく分からなくてね。具体的な手順はある程度調べて分かったんだが、どうにもイメージが湧かないんだ」

「なるほど……。じゃあもう一個の聞きたかったことって、それだったんだね」

「そうなんだ。友人が少ないというのは、こういうときに不便なものだな」

話題が話題だが、一生懸命に首をひねるふたりの仕草はシンクロしていて、どこか妙に微笑ましい。

「うーん……。やっぱり僕には、無理なんだろうか」

アヴィケブロンの台詞に、立夏はがばつと顔を上げた。なにそんな、無理だなんて。せっかく思いを確かめた彼らに、残念な結末など似合わない。

「いや……。いやいやいや、任せて！ ここには経験豊富なひと

がいつぱいいるじゃん！」

「しかし……」

「なんだよお、せっかく好き同士になれたんじゃないか！俺にだって、手伝わせてよ！ふたりの役に立ちたいんだ！」

立夏は立ち上がって、力強く拳を握ってみせる。その勢いに一瞬驚きこそしたが、アヴィケブロンはそつとその手に手を重ねた。

「有難う……、立夏。君という親友がいて、僕は心強く思う」

「アヴィケブロン……！！」

熱いハグが交わされる。極めて美しい友情のひとコマではあったが、その行く先の保証は神様だって知りもしない。ある意味において、立夏の協力によって、事態は斜め上に転がっていくことが確定してしまったのだった。

初夜、とは。

普通はなんとなく雰囲気を作って挑むものなのだろうが、そこは律儀なアヴィケブロンであり、アシュヴァッターマンであった。

恋人同士となつてしばらくの逢瀬で、きつかけを作ったのはアヴィケブロンだ。共に過ごす甘ったるい夜の時間、そのなかで、こんな会話がなされたのだった。

「ところで。僕は君を抱きたいんだ、アシュヴァッターマン」

「いいぜ」

やや唐突にそんな要望を出してくるの莫名其妙だし、それに即応じるアシュヴァッターマンもなかなかのものだ。しかしふたりっきりの部屋で、ふたりしてなんの違和感も持たずに喋っているの、恐ろしいくらいスムーズに話が進んだ。

「……僕が抱くのでいいのか？客観的には逆の方がしつくりくるだろう」

「ほかから見てどうこうは関係ねえな、俺とあんたの問題なんだから。あんたが喜んでくれるなら、俺はなんだって嬉しい」
「そうか……。有難う、アシュヴァッターマン。じゃあ、明日また来てくれるかい。色々準備しておくよ」

「了解。楽しみにしてる」

「うん。僕も」

という流れからの、初夜当日である。

当然のことながらアシュヴァッターマンは抱かれる気まんまんアヴィケブロンのところへやってきたし、アヴィケブロンもそのつもりで彼をすぐにベッドへと通した。

「ん？これって、」

「ああ、うん。ふたたび使うのなら、大きい方がいいかなって。

ゴーレムに作らせた」

「へえー。サンキューな！」

アシユヴァッターマンの体軀を受け止められるようないつの間にか巨大化しているベッドに面食らうどころか礼を言うあたり、非常に波長の合ったカップルである。そうしてふたりしていいそとベッドに上がると、アヴィケブロンはパチンと指を鳴らして、室内の明かりを少し落とした。

「あの……、知ってると思うけど、僕の肌は……」

「ああ、分かってるって。触ったりしても痛くはないのか？」

「うん。見た目がそうってだけなんだ。サーヴァントだからね、結局」

「なら安心した」

「アシユヴァッターマン……！」

爛れた皮膚を嫌がるどころか気を使ってもらって、いつペンに気持ち盛りが上がる。ここまで己を受け入れてくれる彼にこそ、その身体の内側へも自分を受け入れて欲しいと願ってしまふ。アヴィケブロンは徐々に衣服を消し去り、顔面を覆う仮面に手をやった。深呼吸をして、それも外す。薄暗いなかとはいえ、醜い肌だと分かっってしまうだろう。身を強張らせるアヴィケブロンを、アシユヴァッターマンは見上げた。信頼と恐怖との間で葛藤する姿に、胸の奥が熱くなる。

「触れても？」

「……っも、勿論……」

「ありがとな」

「……く……っ！」

ごわついた髪に触れ、荒れた頬をなぞり、額に唇を寄せる。すべての動作に溢れんばかりの愛情があることに気付いて、アヴィケブロンは瞳がじわと潤んだ。

「やっとなんたに直接触れられた」

「……アシユ、僕の、アシユヴァッターマン……！」

激情のままに、アヴィケブロンは口付ける。これまでも接吻自体は既に許されていたのだが、アヴィケブロンが、仮面を外せなかったのだ。黄金のマスクの下半分だけを可動式にして交わっていたキスとは違い、彼の存在が、とても近くに感じられる。愛しくて愛しくて、涙を零しながら唇を重ねるアヴィケブロンを、アシユヴァッターマンは止めなかった。

「……今度は僕が触れても……？」

「もちろんだ」

分厚い胸板に触れて、アヴィケブロンがアシユヴァッターマンをそっと押し倒す。褐色の背がシートに触れるのと同時にこめかみに口付け、リップ音を立てながら下っていく。

「……そういう、初めてだって言ってたか？　こういうの……」

「……うん……」

小声で答えたアヴィケブロンを、力強い腕が励ますみたいに抱き締めた。

「大丈夫だからな。好きにしてくれていいんだぞ？ もし痛かったら言うし……、まあ俺は、痛えのは慣れてるけど。今も、それ、舌……。うん、気持ちいい。なんだよ、上手いじゃねえか」

「そう？ 嬉しい……。いっぱい、勉強したんだ」

ちゅうちゅうちゅばちゅばと肌に吸いつき、跡を残しながら掌で肌を撫でる。かさついた皮膚が少しくすぐったかったが、それも彼の一部だと思えば愛しさが募った。ずっと隠していた部分を己にだけは見せてくれるのだ。これを特別扱いと言わずしてなんと言おう。

「か、身体……。♡ 身体、見せてくれ。アシュヴァッターマン……♡」

「ん……。♡」

可愛いな、と思ってしまったなら、直接的な要求にだってすぐに応えてやりたくなってしまう。アシュヴァッターマンがこくりと頷き身に纏った亙衣を消してみせると、アヴィケブロンはたまらないといった風に感嘆した。

「ああ……。♡」

「はは。照れくせえな……。♡ あんま見んなよ？♡」

「嫌だ……。♡ 僕にはぐいぐい来たくせに！♡」

「はは♡」

見下ろしてくる視線に、肉欲が滲む。ゴーレムにしか興味がないようで、男っぽさの見られないような細い身体をしていて、それでいて彼はきちんと雄だったのだ。そして見据えられた自分分は、これから彼に女にされる。不思議なもので、そこに嫌悪は感じられなかった。未知の扉を開く高揚と、彼との新しい関係性への期待に自然と口角が持ち上がる。

アシュヴァッターマンが己の変化に感心しているうちにも、アヴィケブロンは探求心のまま、目の前の肢体を確かめていた。触れて、舐めて、堪能して、しまいいには、露出したペニスの根元へと顔を寄せていく。縮れた陰毛に鼻をうずめ、ひくひくとそこを嗅ぎ始める。

「ふ、は……。♡ すごい、君の匂いがする……。♡ だ、駄目？♡ 駄目かな？♡」

「おいおい、んなと……。♡ もー……。、いいよ、好きにしないで……。♡」

「~~~~うん……。♡」

一応少しは遠慮をしていたらしく、許可が下りるなり、アヴィケブロンはくんかくんかと思いつき股間を嗅ぎまわった。陰茎の裏にまで鼻を当てられると、恥ずかしさと快感とで下半身が熱を持つ。アシュヴァッターマンの性器がむくりと頭をもたげるのを見て、アヴィケブロンは小さく問うた。

「……君は……、こういうの、慣れてるの……？♡」

「ん？♡ ……ああ、俺はあまり色を好まなかったが、そうだな、それなりに」

「相手は女性？ ……男性も……？」

「女だなあ。ただ、男同士でつても周りにそこそこいたから、話には聞いているっただけで」

「そ、つか……！」

ぎこちなく笑うアヴィケブロンを、アシュヴァッターマンが撫でる。

「なんだよ。気にすんなって！ お前が初めてだろうがそうでなからうが……。俺が抱かれてやってもいいなと思った男は、お前が初めてなんだからさ！ 愉しもうぜ。今までで一番いい夜にしよう。な？ アヴィケブロン……！」

常では険しい表情が多いけれどもニカツと微笑むと急に幼くなる、その笑い方がアヴィケブロンは好きだった。紡がれる言葉の情の深さにも心を打たれ、感動したぶんだけまたどつと性欲が増す。彼のなかへ身を沈められる幸運に、アヴィケブロンは深く息を吐いた。安心して淫欲の火へ脳味噌まで任せてしまふと、心地良い火照りに神経が支配されていくのが分かった。「嬉しいよ、アシュヴァッターマン……！！♡ じゃあ初めて

同士で♡ 気持ち良くなるう、もつと君を教えてくれ！♡ どうされたらイイのか、どこが好きなのか、もつと、もつと……！！♡」

「はは……♡」

触れて、舐めて、互いに息を荒くしながらじやれ合い続ける。のぼせたみたいにつつとりと目を細めたアヴィケブロンは、ベツド脇の引き出しからローションを取り出した。たつぷりと手に取り、人肌にぬるめてから、アシュヴァッターマンを見る。無言で彼が頷くと、瘦せた指でそのアナルをなぞった。

「……ここに、僕のを……！！♡ あああ、信じられない……つ！♡」

「~~~~~、つ！♡」

潤滑剤のぬめりを借りて、つぶん、とアヴィケブロンの指先が胎内に侵入する。いったいどれほど勉強したのだろうか、細い指はぬるぬる滑らかに動き、愛しい人の性感帯となる場所を懸命に探していた。

異物感徐徐に、緩い快楽へと姿かたちを変えていく。アシュヴァッターマンの勃起したペニスから、透明な涎が次々と溢れた。淫らな絵図に、アヴィケブロンはごくりと唾を飲む。

「アシュ……、アシュヴァッターマン、僕は……♡ 初めてだけど、君と、気持ちいいセックスがしたくて……♡ だから色々、準備してみたんだけど……♡ ね、使っていい……？」

♡ 使ってもいい、かな……?♡

「……ハッ♡」

この期に及んでまだ律儀な賢者の問いに、アシュヴァッターマンは一笑する。それは侮蔑でもなんでもなく、*「俺が嫌だと言わねえだろ？」*という内心の表れだった。アヴィケブロン自身や、その愛情に対する絶対的な信頼が、彼にそう思わせてくれている。

しかし、アシュヴァッターマンはこの時点ですでに、大きな判断ミスをしてしまっていた。彼は知らなかったのだ。童貞をこじらせてしまった凝り性の魔術師が、いかにヤバいのかということを。

「有難う、アシュヴァッターマン！♡ では……、」

「うん!?♡」

周囲の靈気に乱れがあつて、アシュヴァッターマンは思わず声を上げる。視線の先に、すべての答えが出揃っていた。アヴィケブロンはなぜかこのタイミングで、ゴーレムを召喚していたのだ。それも、アシュヴァッターマンにそっくりなやつを。

「……ちよ、ちよと待て!?♡ これはさすがにおかしいだろう!!♡」

「すまない。君を悦ばせてあげるには僕では力不足だと、何度シミュレーションしてもそう結論が出てしまうんだ……。従っ

て、パワー不足を補うべく、性交サポート用のゴーレムを作ってみた」

「いやでもどう見たって俺だよな、これ!?♡」

「勿論だよ、寝所で君以外を見る気はない」

「ふぐ……っ!♡」

光とともに現れたのは、どの角度から見てもアシュヴァッターマンとしか思えない二体のゴーレムだった。よくよく比べてみれば、少し本人よりも色が薄いし、表情がどこか大人しい。

熱烈な台詞に一瞬誤魔化されそうになったが、そもそも、いざ致そうという段階で他人?がこの場にいることの方がおかしいのだ。いくら性交サポート用とはいえ。というか性交サポートってなんだよと、問題点の多さにアシュヴァッターマンの頭脳ですら追いつかない。

「や、待て待て待て……!?♡ あー、あー、あー……、わ、分かった!♡ とにかくだ!♡ 別に取って喰いやしないから!♡ 俺はありのままのあんただけで十分だから、アヴィケブロン!♡」

「気遣いを有難う、アシュヴァッターマン。しかし不得手ではあつても、それを補う手をきちんと備えているのが魔術師というもの!」

「おいしいおいしいおいしい……っ!♡」
己そっくりのゴーレムたちに腕を押さえられ、上半身の自由

を奪われる。真面目すぎか！一周回って馬鹿なのか！と思いはしたが、実にアヴィケブロンらしいとも感じられてしまい、アシュヴァッターマンは混乱した。彼らしさを愛しているし、尊重してやりたいけれども、これは、この状況は、どうやって切り抜けたら良いのだろうか。自身がどう振舞うべきか悩むうちにも、アヴィケブロンは着々と愛撫を進めてくる。

「~~~~~……っ♡」

愛しいひとのかさついた手に撫でられるのもさることながら、真上から見下ろしてくる、アシュヴァッターマン型ゴールムの平然とした視線が辛い。この場でいやらしく喘いでいるのは己だけなのだと、思い知らされるような心地がする。

「アヴィ、アヴィケブロン……！！♡ 俺……！！♡」

「大丈夫、大丈夫だ。恐れることはないよ。ここには僕と、君と、君の分身しかいないのだから……。それに、君の反応は僕がしっかり観察している。必ず悦くしてあげるから、安心して」「いやなんつーかつ、~~~~~……っ！！♡」

とうとうゴールムたちまで手を伸ばしてきたので、アシュヴァッターマンは身を竦めた。腕は相変わらず押さえられたままだが、余った方の手で、彼らはそれぞれにアシュヴァッターマンの肉体をまさぐっている。三人ぶん三方向から、予測できないタイミングで愛されてしまい、アシュヴァッターマンの混乱と困惑はさらに深まった。びく！♡びくん！♡と身体が跳ね、

自然にじわりと涙が滲む。

「ふむ……、分かったぞ。脇と乳首だな、当座の君の性感帯は」「っ！！♡」

尻穴をほぐしながらそんなことをのたまってしまおうのが、アヴィケブロンという男の性格だった。分析に夢中になると、ただでさえデリカシーがないのに余計に悪化してしまうのだ。そこを集中的に頼めるかね、とゴールムに指示をしているのまで丸聞こえで、本当に泣きたくなくなってくる。

そうしてオーダー通りに、ゴールムたちは乳首と脇への集中攻撃を始めてくれやがったのだった。

「あ、あ……！！♡ アヴィケブロン……っ！！♡ いやだああ……っ！！♡」

戦いでなら、こんなに情けなく声を上げたことなんてないのに。もちろん房事でだってこんな風にはならないのであって、誰にも見せたことのない痴態を曝け出していることに、煮え立つような羞恥が湧き上がる。眉を寄せ、涙目になってもがく姿がそれでも、じつと観察されていることは痛いほど感じられた。一見冷たくさえ感じるような鋭い視線の奥にどうしようもない欲が滲んでいるのが分かってしまえば、なおのこと辛い。はあ♡、はあ♡と息が弾むのに合わせて、ローションでぐずぐずになったアナルが収縮を繰り返す。

「照れなくていいよ、愛らしい君……♡ なんて可愛らしい

んだろう！♡ 君は本当に素敵だ、アシュヴァッターマン……！！ ようやくひとつになれるね、嬉しいよ、嬉しい……っ！♡ さあ繋がろう、君を愛させてくれ！♡ アシュ、僕の、アシュヴァッターマン……っ♡」

十分にほぐれた肛門へと、アヴィケブロンが性器を突き立てる。一気に貫きたいのをこらえながら、ゆっくりゆっくり奥へと進む。

「あ……、ごめん、断るのを失念していた。その、スキンは……！！♡ どうしても君を直接感じたくて、僕らはサーヴァントだし、余程大丈夫だろうと判断したんだけど……！！♡ アシュ、ごめん、嫌かい……!?♡」

「も、いい……！！♡ いいからあ、ちよつと待……っ！♡ んんっ、ん……っ！♡」

生真面目な質問にも、まともに答えられそうにない。だって、それどころではないのだ。自分と同じ顔をしたゴーレムに見守られながら処女を奪われて、恥ずかしいし苦しいし、屈強な戦士といえども叫びださないのがやっとなぐらいだった。

「つく……！！♡」

「ふ、う……っ！♡」

なんとかこらえて、アヴィケブロンを受け入れる。小柄であるがゆえに男性器も控えめなサイズだったのが幸いしたように、一度収まってしまえば苦しさも少し落ち着いた。ひどい目

に遭った、いや、まだその最中か、と戸惑う瞳でかのひとを見上げれば、彼もほっとした顔をしていて笑ってしまう。

若干空気が和やかになりかけたそのとき、アヴィケブロンはまた例の空気の読めなさで、爆弾発言をぶちかましたのだった。

「あー、いい……♡ これ、すごい……♡ 君とこうして素晴らしい時間を過ごすために、たくさん学んだし……、体力を持たせられるように魔法薬も飲んだんだ。あと、様々な条件でテストした結果、僕はどうも射精に至るまでが平均的な男性よりも早いらしいので……ペニスにスイッチをつけてみたよ」

「は!?♡」

驚いて目を丸くするアシュヴァッターマンにも、アヴィケブロンは動じない。驚かれ慣れているのだ。常人では不可能なところでもない発想力があればこそ、彼はゴーレムマスターと呼ばれるに至っている。

「無論、装置というよりは概念的なものだけだね。複腕を操る技術と一緒に。僕が意図してスイッチをオンにしない限り、どれだけ快楽を得ようと、僕は絶対に射精しない」

「なん……っ!?♡」

「だから安心して性感を得ていてくれアシュヴァッターマン。

今の僕は無尽蔵な体力を持ち、射精のタイミングまでコントロールできる男になったのだから……!!♡」

「……っひ!?♡ あ、あ、ひああああああああつ!!♡」

彼の発言を聞けば聞くほどやばい感じしきしないのだが、それをたしなめる隙も与えずに、アヴィケブロンが腰を使い始める。絶対射精しない。無尽蔵な体力。そして溢れる探求心。これはもしやまずいんじゃないかと焦る以上のスピードで、下肢に熱が集まっていく。ぐぼ♡ぐぼ♡ぐぼ♡ぐぼ!!♡とイイところを容赦なく突かれ、アシユヴァッターマンは思わず、両足のつま先を丸めた。腕をベッドに縫い留められ間拔けな万歳状態になったまま、立て続けに与えられる快楽に喘ぐ。

「あ、あ、あ……っ!!♡ ああああああああつ!!♡ イぐ、イ……っ、んんんんんんんん……っ……っ!!♡」

「!!♡」

がくん!!♡とアシユヴァッターマンの身体が仰け反り、性器から絶頂の証を吐き出した。勢いよく迸った白濁はチョコレート色の肌を飾って、あろうことか、その頬にまで淫らな色彩を付け足している。

「良かった、ちゃんと気持ち良くなれたんだね!!♡ ああ……、顔に♡ ふふ、でもそんな君も……♡ たまらないよ、アシユヴァッターマン……♡」

「んくう……っ♡」

からかうと、悔しそうに唇を噛む。それなのに、いったばかりの男性器は、むくむくと頭をもたげていた。アヴィケブロンもそれに気づいて、軽く首を傾げている。

「……おや、陰茎が……♡」

「……っ……っ!!♡」

「そうか、精液にまみれると興奮するのか……。なるほど興味深い」

「!!!♡」

確かにそうかもしれないし、実際そうなっているのだろうがそれにしても、はつきり口に出していいことと悪いことがあるだろう。さすがのアシユヴァッターマンも声を荒げるのだが、研究モードに入ってしまったアヴィケブロンは想像以上のタフさであった。

「……っの、分析魔アあああ……っ!!♡」

「自分のもの限定だろうか? ゴーレム相手でも良いんだろうか。ちよつと試してみよう」

「おい、おい、アヴィケブロン……っ!!♡」

「よし君たち、彼の顔に精液をかけてみてくれないか」などと、物騒な声が聞こえる。霊衣を消し去ってしまったのだろうか、ぐつと突き出された二本のペニスが見界に入って、いよいよ逃げられないと知った。

「あ……っ！♡」

こしゅ♡、こしゅ♡、と眼前で自慰が繰り広げられる。どうやらゴーレムたちは喋れないらしいのだが、褐色の肌にも関わらず頬を染め、唇を尖らせているさまから快感の度合いが窺えた。人前でオナニーなんてあり得ないし、彼らの雄の先端は間違ひなく己の顔を的にしていて、ここは地獄かと息が詰まる。驚愕に打ち震えている間にも己の顔をした全裸のゴーレム二体のペニスは張り詰めていき、そうして。

「ひああああ……っ♡ あああああああっ！♡」

平均的なそれよりもかなり立派な一物から、揃ってザーメンが噴出する。びゅくるるるるっ！♡びゅくびゅくびゅくっ！♡と激しく竿をびくつかせて、白濁の雨が降り注ぐ。アシュヴァッターマンの顔面はたちまち雄汁にまみれ、見るも無残な姿になった。そのタイミングで二、三度ピストンをされてしまえば、もう抗いようもない。アシュヴァッターマンはあつけなく、再度遂情してしまったのだった。

「……っひ、あ、イ……っ！♡ またいくううううううー
ー……っひ、あ、イ……っ！♡ ひんっ、ひ……っ！♡」

「やあ、上手くいったみたいだね……♡」
「ひい……っ♡」

アヴィケブロンは律動を止めない。それどころか、ゴーレムらに指示してアシュヴァッターマンの顔についた精液を舐め

取らせていた。それが済んだら、乳首を舐めるように命じる。ぺろ♡ぺろ♡と舌でいじられしやぶり尽くされた乳頭が完全に勃起上がったのを見計らって、今度は脇を舐めるようにと。
「あ……っ！♡ やめ、やめ……っ！♡」

べろ♡べろん♡べろん……♡と両脇をいつべんに舐められると、アシュヴァッターマンの声がひっくり返った。目尻に涙を浮かべ、ゴーレムの主に訴えても聞いてくれる様子はない。それどころか、彼の視線が射るように己を見つめているのが分かってしまい、かえって羞恥が深まってしまった。自分と同じ顔の土人形に脇を舐められ、尻には男性器を突っ込まれて。そんな状況で喘ぐ痴態を観察されてしまうだなんて、恥ずかしくて、恥ずかしくて、どうにも。

「そんな……っ！♡ そんなとこっ、嫌だっ、見られんのやだっ！♡ 見ないでくれっ、見るなあああああああっ！♡ ふあああ、ああああああああー……っひ、あ、イ……っ！♡」

アヴィケブロンから停止の指示が出ることはなかったのだ、アシュヴァッターマンは両脇を舐められ続けたまま、射精してしまう羽目になった。いつてもやめてもらえずに、たまらずまた極まってしまふ。情けない姿を視姦されてさらに昂り、断続的な射精が止まらない。脇に舌を這わされて、それをじいっと見下ろされて、もう何回目かも分からないほど、アシュヴァッ

ターマンは繰り返し絶頂した。びゅくんっ！♡びゅくんっ！♡
びゅるるっ！♡と粘度の薄い精液を射ち出して、ようやくア
ヴィケブロンがゴーレムを止めた頃には、息も絶え絶えといっ
た様相になっていた。

「……ふむ……」

アシュヴァッターマンにナニを突っ込んだまま、アヴィケブ
ロンは小さく呟く。場にそぐわない雰囲気ではあったが、それ
をもプチ抜く強烈な台詞がそのすぐあとに続いたので、言われ
た方としてはたまったものではない。

「君は、あれだね。恥ずかしいのが好きなのか」

「あア!?♡」

「なに、照れる必要はないよ。ああでも、恥ずかしがった方が
気持ちがいいのかな。じゃあたくさん恥ずかしがつてくれて構
わないのだけれど……、とにかく僕は君が気持ち良かったらそ
れでいいんだからね。そんなことで嫌ったりしないから、安心
して……!♡」

「いや、今のはそういう意味じゃ……!♡ 訂正っ、訂正しろ
アヴィケブロンっ!♡ 俺は、おれは……っ!♡ ~~~~~
~~~~~っ!♡」

ゆさ、と繋がった下肢を揺さぶられると、きちんと否定もで

きやしない。気持ち良さそうに腰を動かしているアヴィケブ  
ロンと、今まさに女にされてしまっている己を見下ろしている自  
分そっくりのゴーレムたちと。六つの瞳から容赦なく視線を注  
がれて、肌にちくちく刺さるようだった。

「……っ!♡ う、ふうううう……っ!♡」

皮膚を切られようが肉を裂かれようが武器を手に戦える自  
信があるのに、ただ、こうして見られているだけで。どうしよ  
うもなく高まって、ペニスが硬くなって、いけない、と思っ  
ているのに、それなのに――。

「あああああああああつ!♡ やああ、いやらああああ  
……っ!♡」

またしても絶頂する。みつともなく、高々と精を吐く。背中  
を反らしたアシュヴァッターマンの性器からすっかり薄くな  
った淫液がびゅる♡びゅるる♡と噴き出すのを見、アヴィケ  
ブロンは双眸をとろけさせて微笑んだ。

「はあ、あ、アシュ、僕のアシュ……!♡ またいつてくれた  
んだね♡ 可愛いよ、君、すごく可愛い……♡ こんなに非  
力な僕のことを受け入れてくれて♡ たくさんたくん、射  
精してくれて……!♡ ああ気持ちいい、僕のペニスがぎゅ  
っぎゅって締めつけられてるよ♡ 君の、君のこもほんと

に、可愛い、可愛い……！♡」

いつも以上に甘い声色で、吐息混じりにアヴィケブロンが喘ぐ。多くの学びが結実し、不得手な分野でも想い人を悦ばせられたという嬉しさと、媚肉に愛されている男根の、物理的な心地良さと。それら二つが合わさって、賢人の脳味噌をぐずぐずに溶かした。この先に待つさらなる快楽へ溺れるべきなのだと、確信めいた妙な使命感がアヴィケブロンのを開かせる。衝動に任せ、厭世家を自負していた男は自ら俗に身を墮とした。

「あああ！♡ なんつていやらしい動きして、ほんとに……！♡ アシュ、君のこゝ、アヌスは、ね……♡ とつても可愛い、おまんこだよ……♡ えっちですけべな、おまんこだよおおおおおお……♡！♡」

「ふえあ!?♡」

そんな必要があったのか定かではないが、聖杯による知識のアップデートで、その単語が女性器を示しているということだけは分かった。分からないのは、なぜそれが己のアナルに向けて使われているか、ということだ。

もうひとつ、なぜアヴィケブロンが突然そんなことを言い出したのか、については、答えは割と明白だった。性交の勉強、ということと立夏を通じて借りた大量の書籍——各サーヴァ

ントたちの私物である、いわゆるエロ本——のなかに、黒髭チヨイスの淫語まみれな薄い本が混じっていたのだ。恥ずかしいのが好き、だとかいう概念は、主にそれらの内容から学習されていた。そういうわけで立夏の手助けは実際に立った半面、あまりにも活用されすぎている。突然の聞き慣れない言葉に、アシュヴァッターマンはもちろん面食らっていた。

「ア、ア、アヴィケブロンっ！♡ それは、違……♡ つ♡ 俺は、男だから！♡ んなモンはないっ、だから……♡！♡」  
「はは……♡ そんなこと言ったって、君、悦んでるじゃないか♡ ほら、ほら♡」

「あう！♡ ふああうう、んんん……♡！♡」

悲しいことに、アヴィケブロンは嘘を言っているのではない。卑猥な単語を聞かされたときから、アシュヴァッターマンの感度は信じられないくらいに跳ね上がった。とん♡と軽く内壁を穿たただけで、やけに媚びた声が漏れる。雄々しい肉棒はびんと勃起、ひっきりなしにカウパーを垂らしていた。

「あ……♡ あ、あ……♡」

「なあに、恥ずかしがることはないよ。ああいや、その方が気持ちいいんだったか……、難しいな。とにかく僕は、君を悦びてあげたいんだ、だからこれでいい。君はただ、気持ち良くなつてればそれでいいんだよ。この、いやらしい……おまんこで♡ たくさんまんこ突いてあげるからね♡ 君の……、お

まんこ♡ 処女まんこ♡ アシユヴァッターマンの初めて  
おまんこ♡ 僕のものだ、僕の……っ！♡」

「ひう……っ、~~~~~……っ！♡ ん、お  
おおっ！♡ あ、あああっ！♡」

痩せた身体で、細い腕で、そのくせ目だけはぎらつかせて、  
あの物静かな男がこちらを見据えている。ばん！♡ばん！♡  
ばん！♡ばん！♡と鋭く腰を使われるのもさることながら、  
ビロードのような艶めかしい音域に鼓膜を揺らされるのも相  
当こたえた。アシユヴァッターマンの男根は、もう下腹につき  
そうなくらいに反り返っている。

「アシユヴァッターマン……！♡ 君のっ、君のおまんこ……  
っ♡♡ おまんこすっごく気持ちいい……っ！♡ アシユ  
まんこ僕のちんぽに吸いついてるっ！♡ アシユまんちよえ  
っちだよおっ♡ アシユのエロまんちよほらっ、ぐねぐねし  
て、ぐによぐによして……っ！♡ こんなえっちなおまんち  
よ隠してて、君ってやつは！♡ アシユの処女まんちよおい  
しい♡ 童貞ちんぽに食いついてくる淫乱食欲処女まんち  
よ♡ とつてもとつてもおいしいよおおおとおお……  
っ！♡」

「そん……っ！♡ あ、あ、も、アヴィケブロンんんん……  
……っ！♡ そこおっ！♡ それっ！♡ いやあっ！♡ い  
やら……っ！♡」

少々小ぶりのアヴィケブロンのペニス圧迫感こそそれほどでもないが、興奮してやたらめったら突いてくる場所が良くなかった。入口から数センチ入った腹側、前立腺の付近、ちょうどそこに当たってしまつて、胎内から電気でも流されているかのようだ。耳には延々と信じられない単語の群れを聞かされ続け、普段の彼とのギャップにくらくら目眩がする。アシユヴァッターマンは本人も知らぬうちに、淫らにその表情を崩してしまつてた。ばちゅ！♡ばちゅ！♡ばちゅ！♡ばちゅ！♡ばちゅ！♡  
♡といかにも経験の浅い男子らしく突っ込まれる一物がまるで折檻みたいに感じられて、可愛くて仕方のない子供に尻でも叩かれているかのような、倒錯した心境に陥る。目は潤み、舌は唇から零れ落ち、それこそ未体験の快楽に脳髓まで痺れてしまふそうだ。

「あ、あ……っ！♡ おまんこおっ！♡ 気持ちいいよお、  
アシユヴァッターマン……っ！♡ 君のまんまん、僕を求め  
てみたいに……っ！♡ はあ、も、イきたい、イきたい……  
っ！♡ アシユう、おまんこで出させてえっ！♡ 君の中で  
どぴゅどぴゅ♡って、精液い……っ！♡ 出させてくださ  
いっ！♡ アシユの初めておまんこちゃんにつ、僕の童貞ち  
んぽ汁……っ！♡ 出したいんだっ、いっぱい出したいっ！  
♡ アシユの処女まんこ！♡ 僕のものにさせてえっ！♡  
アシユの処女おめこに出したいっ♡ アシユのエロ可愛い新



「……………っ！♡」

アシュヴァッターマンが驚くのも無理はない。アヴィケブロン  
の射精は長く長く、数回分をまとめて出しているかのようだ  
った。呼吸がもたず、重ねた唇を離してアヴィケブロンは上半  
身を立てる。それにしても、ぶびゅぶびゅ♡ぶぢゅるる  
るるる……………っ！♡と勢いすら衰えずに、アシュヴ  
アッターマンの胎内へ淫液のシャワーがぶちまけられている。

「そ、か……、イカずに我慢し過ぎるとっ、こうなるのか……！  
♡ すまない、アシュヴァッターマン……っ！♡ これは検  
証不足だった……！♡ 申し訳ないがまだ……っ、出るっ！  
♡ 出るううううう……っ！♡ あ、あ、気持ちいい……

っ！♡ 君のおまんこに、中出し……っ！♡ 大量中出しっ、  
気持ちいい……っ！♡」

「ふひ……っ！♡ ん、んううううう……っ！♡」

どびゅ！♡どびゅるるっ！♡と注がれるたびに、アシュヴ  
アッターマンがびくびく身体を震わせる。しまいには注入と同  
期して射精までし始めて、遂情の際に締まった媚肉がなおアヴ  
イケブロンを愉しませた。ペニスをしゃぶられてアヴィケブロ  
ンが精液を放つとその刺激でアシュヴァッターマンも絶頂し、  
また己を貫く雄を締めつける。延々と連なる射精のリレーは数  
分以上続き、途切れた頃には、ふたりともくったりと脱力して

しまっていた。

アヴィケブロンが生殖器を抜き去ると、ひくつく尻穴から、こ  
ぶ……♡こぶこぶ……♡と粘ついた白濁液が溢れ出す。

「はあ、ふう……♡ そうか、君……♡ こういうのも、い  
いんだね……♡ じゃあこんなのはどうか……？♡」

「んあ、……？♡」

半ば氣をやっているアシュヴァッターマンを見下ろしなが  
ら、アヴィケブロンがなにやら魔術を使い始めた。ぼやけた視  
界では、彼がなにをしているのか、認識することすら難しい。  
しかし実際にしているのも、そう簡単には理解できなかった  
だろう。なにせアヴィケブロンは、予め用意していたパーツを  
用いて、己の陰茎を二本に増やしていたのだから。ポウ、と局  
部に光が灯り、下腹のほぼほと同じ箇所から、双子のペニスが  
ひよこりと横に並んでいる。

「僕のは少し控えめなサイズだったみたいだから……♡ こ  
れで、君も♡ きつと満足いくんじやないか、な……っ！♡」  
「ひ!?♡ あ、あああああああああ……っ!?♡」  
な、なに!?♡ なんだあああああっ!?♡」

散々出し入れされ緩んだ尻穴へ、二本の竿がぐいぐい突っ込  
まれていく。みぢみぢみぢ……♡と限界まで入口が開かれ、や  
がて、ぐ……っぽんっ！♡と奥まで異物の侵入を許してしま  
った。





「あはは……♡」

想い人の乱れっぷりに感化されて、アヴィケブロンまで歯止めがきかなくなっていた。ゴーレムたちに目で合図を送ると、突き刺した陰茎はそのままに、アシュヴァッターマンの体位を変えていく。

的確な補助により、真上から綺麗に串刺しにされた、卑猥なまんぐり返しが完成した。

「ひあ……♡」

己と同じ顔をした人形たちの視線を受け、逆向きに垂れ下がったアシュヴァッターマンのペニスがひくん♡ひくん♡と浅ましく震える。本人が悦んでいるのに影響されてか、ゴーレムたちもいささか興奮している風だった。

「じいつと見られちゃって、恥ずかしいね……♡ おまんこにこんな、二本も……♡ おちんぼを銜え込んで、ひっくり返って恥部まで曝して……♡ 見てごらん、ほら、彼らのペニス……♡ 君の媚態に反応してるみたいだよ……♡」

「ひい……っ！♡」

言われるがままに目をやれば、確かにゴーレムらの竿は完全に勃起しており、肉欲を露にしてしまっていた。自分自身に欲情されるとはいったいどういう状況なのか？ 冷静さを欠いた頭では受け止めることすらできず、ただただ下腹が熱を持つ。「本当にいけない子だ……♡ 僕以外を誘うだなんて♡

君の身体はいやらしすぎる♡ いやらしすぎる君には……、お仕置きだよ？♡ とつても恥ずかしくって、気持ちのいいお仕置きだ♡ たくさん辱められて、泣いて、イって、反省して……？♡ さあ来るんだゴーレムたち！♡ この雌を貶めてやるがいい……！♡」

「ふえ、あ、あああああああつ！♡ いやらああ、いやあああああああああああああああああ……♡」

主人に呼ばれた彼らはベッドに手足をついてアシュヴァッターマンへと近づいてくる。なにをするのかと思えば、繋がっている箇所へ。アヴィケブロン of 怒張が突き刺さっている哀れな肛門へ、二人してべろりと舌を這わせたのだった。

「ふ……♡ ふふふ、えっちだね♡ おちんぼハメハメさされて伸びきっちゃったおまんこ……♡ ペろペろちゅっちゅされて♡ あははは、はは♡ 君たち、おまんこ美味しいかい？♡ そのいやらしい穴、好きに舐めていいんだ♡ だってこんな、こんなにもはしたないのが全部いけないんだからね……♡」

「ひいひいひいっ、ひいひい……っ！♡」

思い切り開け広げられた窄まりを、ぬるい舌がペろペろとなぞる。アヴィケブロンがゆっくり屹立を抜いていくと、それにも二人は舌を這わせ、唾液まみれに仕上げていった。潤いをま



あああああああー~~~~~っ！っ！  
 後孔へ二本の雄をぶち込まれ、二体のゴーレムから左右に陰毛を引つ張られながらアシユヴァッターマンは絶頂した。自身の顔面にしゃびしゃびの精液を浴びて気絶しそうになっているのに、加虐はいっこうに止む気配がない。

「僕もイクよ、アシユヴァッターマン……っ！っ！君のおまんこにまんぐり中出しっ♡ ダブルちゃんぽでまんぐり種付けっ♡ 君の雌穴、僕の子種で孕ませてやりたいんだ……っ！♡ ほら孕めっ、孕めっ、雌ヴァッターマン……っ！♡ アシユヴァッターまんこでっ♡ 受け止めてくれっ、僕の愛……っ！♡ ぐうううううっ、うぐううううううううううう……っ！っ！♡」  
 「ほあああああー~~~~~っ！っ！大量ザーメンっ、出されちゃったああああああ……っ！♡ アシユヴァッターまんまんにつ♡ どくんっ♡ どくうっ♡ どくうううう……っ！っ！♡ って孕ませ汁が……っ♡ こんなっ、こんな霊基陵辱うううっ♡ ほんとに、孕んじやうっ♡ ポテ腹にされちゃうっ♡ 大量ピチピチおたまじゃくししゃまでっ、強制妊娠……っ！♡ まさかの非力なキャスターに無理やり孕まされて出産なんて♡ 恥ずかしすぎて……っ♡ おっおっ♡ またイぐううううううっ！♡」  
 アヴィケブロンが胎内で射精すると、それにつられてアシユ

ヴァッターマンも再度絶頂を迎えた。その余韻すら抜けきらないうちに、今度はゴーレムたちが、新たな責めを加えてくる。なにをするのかと思えば、快感のためにきゅう……っ♡と縮まったアシユヴァッターマンの陰嚢を、指を丸めて二人で弾きだしたのだった。ぴん♡ぴん♡ぴん♡ぴん♡と好き勝手なタイミングで急所を弄ばれ、アシユヴァッターマンの表情はさらに淫らに崩れていく。

「おおあああああああああタマタマやめへっ！♡ アシユヴァッターマンのまんぐりタマタマっ！♡ ぴんぴんしゅんのやめてくさいイったばっかだから刺激しにやいでっ！♡ アシユヴァッタータマ♡ アシユのタマタマっ、そんな風にしないでくらひやい！♡ そこおたまじゃくし作る大事なことだからっ！♡ おとこのこの大事なこと……っ！♡ おとこのこのっ、シンボルだからあつ！♡ おちんちんとおんなじくらい大事なことだからああああああつ！♡ あつあつそんなに気軽にびんびんって♡ タマタマお許しくだひやいっ♡ そこはアシユヴァッターマンの大事なっ♡ アシユヴァッタータマなんれひゅ♡ アシユヴァッタータマタマ苛めないで♡ こんなにお願いしてりゅのにいいいいっ！♡ 左右からっ、ぴんぴんぴんぴんぴんぴんっ！♡ ひどいっ！♡ 大事なタマタマっ！♡ 大事なタマタマ二人がかりで苛められてっ気持ちいいからもおいくうう



はいやらしい子だ、アシュヴァッターマン……♡ 悪い子は、めっ♡だよ♡ とつてもすけべで♡ 恥ずかしい子、アシュヴァッターマン……っ！♡ 反省しなさい！♡ ほら、ほら！♡」

「あふううつ！♡ ああっ、お尻いいいいいい……っ！♡ お尻っ、ぶたれてっ♡ ガキみたいにいいいい……っ！♡ あっ、あっ！♡ はあん！♡ ふああああああ……っ♡ ごめ、ごめんにやさい、ごめんにやさいいいいいいいい……っ！♡」

「ふふ……♡」

指を綺麗に揃えた平手がぱん！♡ぱん！♡ぱん！♡と何度も尻を叩くと、アシュヴァッターマンはとろけそうな甘い声で鳴く。貫かれたままの雌穴の収縮に、聡い男はにんまりと口角を持ち上げた。

「ああ……♡ 分かってしまったよ、アシュヴァッターマン……♡♡ 僕にはもう、分かっちゃった……♡♡」

「……………？♡ ……なに、が……………♡」

思わせぶりに呟いて、アヴィケブロンは想い人の赤く腫れた尻肉を撫でた。よしよし、と慰める掌とは裏腹に、鋭利な言葉が、アシュヴァッターマンのいびつな性癖を暴露してしまうのだった。

「……君さ……♡ 君、叱られたいんだろう……♡」

「な……っ!?♡ なん、ひうううつ！♡」

返事をするより早くすばあんっ！♡と臀部をはたかれて、自然と嬌声が漏れる。さもありなんと頷きながら、アヴィケブロンはまた腰を使い始めた。

ミサンプルは以上です！ 読んで頂いて有難うございました！

「……俺たちはサーヴァントだ。マスターに従い、戦う責務がある。  
……だが、そこを全うできるなら……。  
この霊基の俺は、生涯あんたと共にあろう。アヴィケブロン、  
あんたの伴侶に。この俺を、選んでくれないか」

「勿論だとも……！ 君が、君こそが、僕の探し求めていた——……！」

憤怒の化身と孤高のゴーレム遣いが、とあるカルデアで恋をした。  
心だけでなくカラダでも繋がろうと  
セックスの勉強をし始めたアヴィケブロンだったが、しかし——!?

◆この本には以下の内容が含まれています◆

※アヴィケブロンについて、Fate/Apocryphaのストーリーのネタバレがあります  
※アシュヴァッターマンについて、マテリアル・属性設定のネタバレがあります

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/んほお喘ぎ/4P/ぶっかけ/乳首責め/脇責め/種付けプレス/ペニス増殖/二輪挿し/まんぐり返し/陰毛いじり/セルフ顔射/タマ責め/スパンキング/犬プレイ/ダブルピース/ご主人様呼び/お掃除フェラ/陰茎振り/尻振り/くぱぁ/アニリングス/顔面に精液排泄/失禁/聖水プレイ/フィストファック/温泉浣腸/公開セックス/モブアシュ(聖水プレイ/公衆肉便器プレイ)/潮吹き/孕ませ妄想/まんぺ/ザーメン提灯/メスイキ/陰茎踏み/陰茎で顔ズリ・ビンタ/尻文字/

「……俺たちはサーヴァントだ。マスターに従い、戦う責務がある。  
……だが、そこを全うできるなら……。  
この霊基の俺は、生涯あんたと共にあろう。アヴィケブロン、  
あんたの伴侶に。この俺を、選んでくれないか」

「勿論だとも……！ 君が、君こそが、僕の探し求めていた——……！」

憤怒の化身と孤高のゴーレム遣いが、とあるカルデアで恋をした。  
心だけでなくカラダでも繋がろうと  
セックスの勉強をし始めたアヴィケブロンだったが、しかし——!?

### ◆この本には以下の内容が含まれています◆

※アヴィケブロンについて、Fate/Apocryphaのストーリーのネタバレがあります  
※アシュヴァッターマンについて、マテリアル・属性設定のネタバレがあります

淫語/♡喘ぎ(受けも攻めも)/羞恥プレイ/言葉責め/んほお喘ぎ/4P/ぶっかけ/乳首責め/脇責め/種付けプレス/ペニス増殖/二輪挿し/まんぐり返し/陰毛いじり/セルフ顔射/タマ責め/スパンキング/犬プレイ/ダブルピース/ご主人様呼び/お掃除フェラ/陰茎振り/尻振り/くぱぁ/アニリングス/顔面に精液排泄/失禁/聖水プレイ/フィストファック/温泉浣腸/公開セックス/モブアシュ(聖水プレイ/公衆肉便器プレイ)/潮吹き/孕ませ妄想/まんペ/ザーメン提灯/メスイキ/陰茎踏み/陰茎で顔ズリ・ビンタ/尻文字/